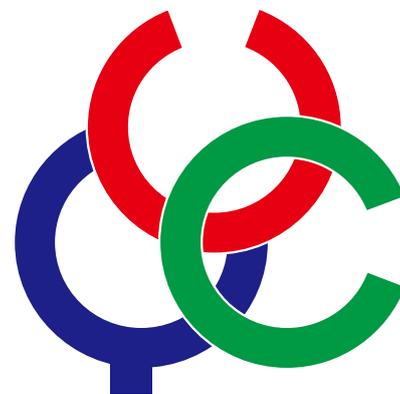


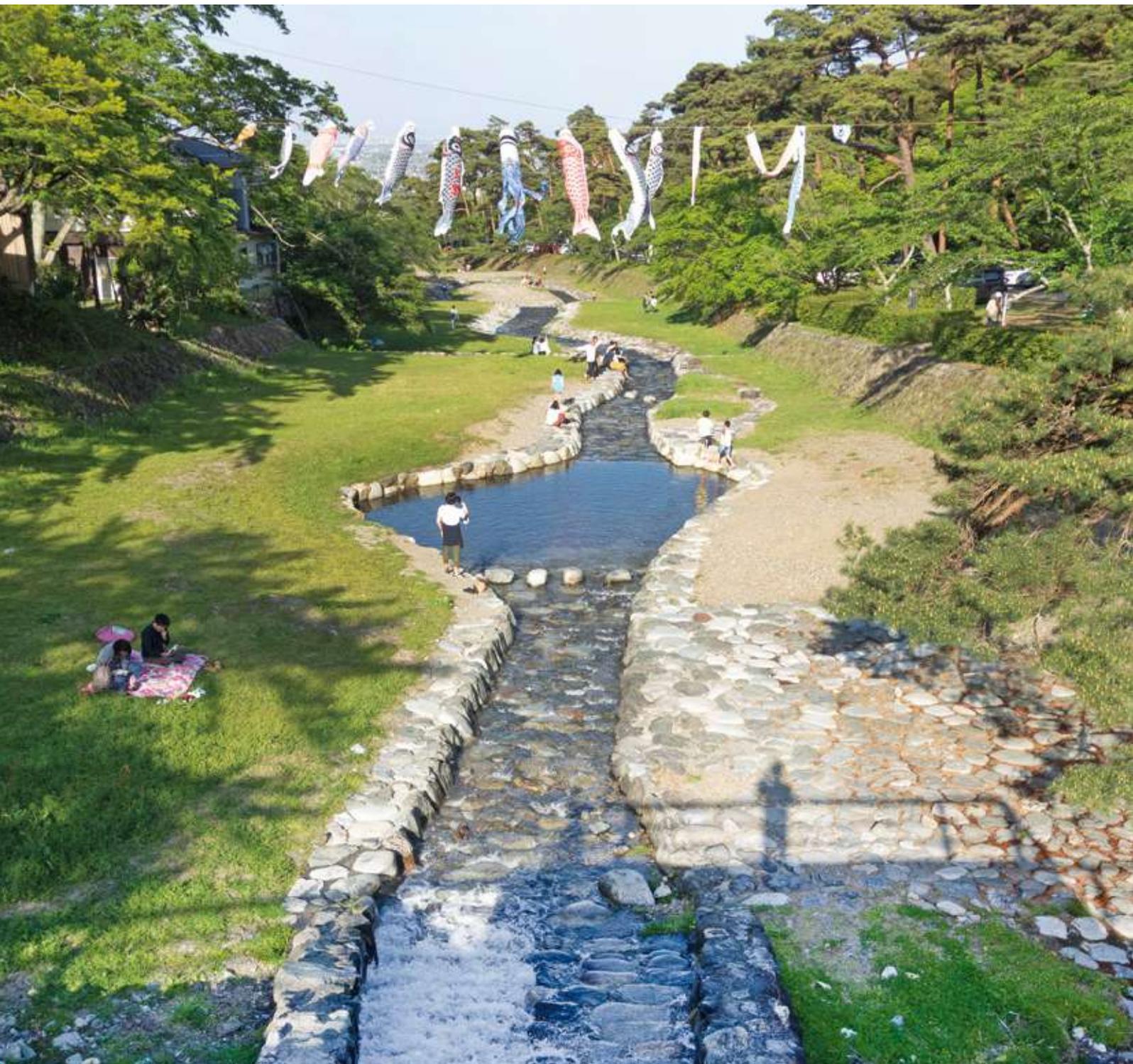
The
CONSORTIUM of
UNIVERSITIES in
YAMANASHI



人口減少と地域課題

令和5年度 学生イニシアティブ事業報告書

September 30, 2024



人口減少と地域課題

令和5年度 学生イニシアティブ事業報告書

Contents

- 2 人口減少と地域課題**
栗田 真司(大学コンソーシアムやまなし事業部長)
- 12 甲府市文化財保存活用地域計画**
文化財を点ではなく面でとらえる
地域の魅力発信マップ作り
安達ゼミ[山梨県立大学]
- 18 Uターンで選ばれる
まちの魅力発見・発信**
[山梨大学]
- 24 「らくん文庫」**
山梨英和大学附属図書館
学生協働サークルLIKE“らくん文庫”
実行委員会[山梨県立大学]
- 30 山梨市シャインマスカット
ロゲイニング**
今井ゼミ[山梨学院大学]
- 36 大月桃太郎プロジェクト
～夢と未来のページ～**
大月ゼミ[山梨県立大学・山梨英和大学・都留文科大学]
- 42 キャンプで深める
地域の輪**
つるっ子プロジェクト実行委員会[都留文科大学]
- 48 地域サポーターと難民支援
～多様性を受け入れる地域づくり～**
難民支援サークル Good Samaritans[山梨英和大学]
- 54 さつまいもが蒸す新しい風**
秋の清里×さつまいもプロジェクト
清里ゼミ[山梨県立大学]
- 60 空き家リノベーションプロジェクト
「結」**
[山梨大学・都留文科大学・山梨学院大学]
- 68 審査員からのアドバイス・メッセージ**
- 70 令和5年度 学生イニシアティブ事業 成果発表会 告知フライヤー**

人口減少と地域課題

栗田 真司 (大学コンソーシアムやまなし 事業部長)

日本の景気動向

日本は、約30年間にわたってGDPがほぼ横ばいである。この間に、日本の2023年1年間の名目GDP＝国内総生産は、ドル換算でドイツに抜かれて世界第4位になった。物価が持続的に下落していくデフレーションに加えて、外国為替相場で円安が進み、ドルに換算した際の規模が目減りしたことが影響している。内閣府によると、日本の2023年度の1年間の名目GDPは、平均為替レート（ドル換算）で4兆2106億ドルであった。一方、ドイツのGDPは、4兆4561億ドルで日本を上まわっている。日本経済は、1968年にGNPで当時の西ドイツを上まわって、アメリカに次いで世界2位となったが、2010年に中国に抜かれ、世界3位が続いていた。しかし、総人口が8,400万人のドイツに再び逆転され、今回4位となった。日本では1990年代にバブル景気が崩壊して以降、長年にわたって低成長やデフレーションが続き、個人消費や企業の投資が抑えられてきた。しかしこれは、勤勉な日本人の努力が足りなかったということではなく、1970年代の田中角栄元首相による「日本列島改造計画」やその後の経済至上主義に国民の嫌気がさしたことの延長という指摘もある。それを施政方針演説

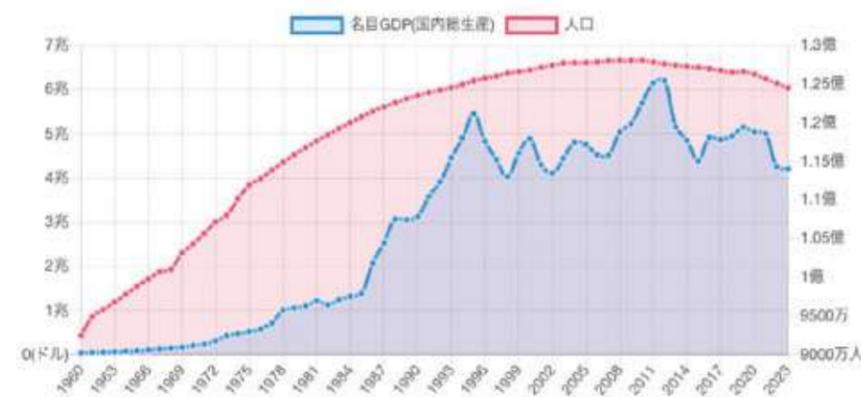


図1. 日本の人口とGDPの推移（1960年以降）

で最初に指摘したのが、当時の首相の大平正芳である。自然環境を重視してきた日本人が、経済重視で自然を破壊し続ける方向性に疑義を唱えたというこのもう一つの方向性が現在も生きていとも言える。

人口減少

景気が低迷する間に、日本の総人口は2008年の1億2808万人をピークに減少が続き、2023年には1億2435万人となっている。このまま推移すれば2100年の日本の総人口は、現在の半分にまで減少し、1000年後には、日本人は消滅すると推測されている。人口が増加するためには、子どもが生まれなければならないが、2023年の出生数は、72万7277人で8年連続で過去最少となっている。一方、死亡した人の数は157万5936人で統計史上最多となっている。

2023年の合計特殊出生率は、過去最低の1.20人となっている。東京に至っては0.99人と初めて1.0人を割り込んだ。

合計特殊出生率は、15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計した値であり、「1人の女性が一生の間に産むとされる子どもの数」に相当する。人口維持のための合計特殊出生率は2.07～2.08人が必要とされている。これを人口置換水準という。日本は、1974年から人口置換水準を下回っている。日本と同様に合計特殊出生率が落ち込んでいる国や地域（2023年）は、韓国0.72人（世界最下位）、香港0.77人、シンガポール0.97人、イタリア1.20人などである。

合計特殊出生率が人口置換水準を下回る国は、人口が減っていくことになるが、日

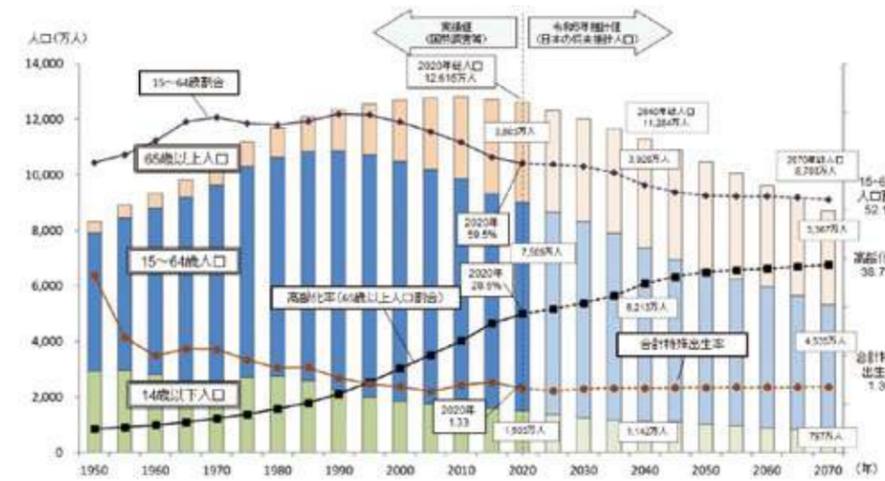


図2. 日本の人口の推移（厚生労働省）

本は健康保険制度や医療技術の進展によって亡くなる人の数も少なく、高齢者の割合は世界一だが、人口減少の割合は抑えられている。

人口減少の要因

日本の人口が急速に減少している理由はいくつかある。第一は、子どもを生んで育てるための経済的負担の問題である。本当は、3人欲しいが、実際には2人でも経済的余裕がなく3人目はあきらめるとい夫婦が多い。平均年収は、この30年間ほとんど上昇していない。物価を考えれば実質的に減額である。住宅の高騰もこれに拍車をかけている。子どもが増えると家が手狭になるが、広い家は高額で賃貸や購入ができない。それだけではなく、建築費の高騰が影響し、住宅の平均延べ床面積は2023年に91.66㎡となり、20年前の2003年の92.49㎡よりも狭くなっている。

またヨーロッパの各国では、私立の大学や2度目の大学入学（セカンドディグリー）に対して学費を徴収する場面があるが、一般的に大学まで学費は無料である。個人の背景や経済力に関係なく、すべての人が教育を受ける権利があるという考え方のためである。日本国憲法の第二十六条にも「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。」とあるが、関連する法案に無償化を謳ってはいない。

第二の理由は、ライフスタイルの変化である。かつ

ての日本では、夫が働き、妻が家事や子育てをするという世帯が一般的であったが、経済の停滞もあって共働きが急増した。総務省の家計調査によると、2023年の共働き率は66.2%で3世帯に2世帯が共働きとなっている。2023年には、夫婦共働きが1200万世帯を超え、専業主婦世帯の約3倍となった。保育所の整備や育児休業制度の拡充など

社会環境整備が進んだことも背景にある。しかし、社会保障制度や税制は、専業主婦を前提にしたものが数多く残っており、現在のライフスタイルに合わせた改革が喫緊の課題である。特に男女共同参画社会の進展である。共働きなのに仕事から帰った妻だけが、さらに家事をして子どもの面倒をみることになる、もう1人子どもをもうける気持ちにはならないだろう。「食事を作るのは女性」、「子育てするのは女性」という専業主婦時代の悪しき慣習を社会として改善することができるか、いま問われている。「サザエさん」に描かれている家庭環境がそこかしこに残っている社会では、少子化が進むことになるのである。

ライフスタイルの変化については、もう一点、結婚をしない日本人が増加していることがあげられる。フランスは、結婚しないで子どもをもうけるいわゆる婚外子が62.2%を占めているが、日本の婚外子は、わずか2.4%であり、結婚して子どもをもうけることが一般的である。こうした国では、婚姻件数が減少すると生まれる子どもの数も減ることになる。50年前の1972年の日本の婚姻件数は、109万9984組だったが、2023年は半数以下の47万4717組になった。現在は「未婚者」だけでなく、あえて結婚しない「非婚者」も増えている。

5年毎に実施される国勢調査には、「50歳時婚歴なし率」という指標がある。いわゆる「生涯未婚率」と呼ばれているものである。2020年の「50歳時婚歴なし率」

し率」は、男性 28.25 %、女性 17.81 %となっており、過去最高の数字となっている。50 歳の男性の 4 人に 1 人以上が一度も結婚していないことになる。なぜ女性が 10%近くも低いのかというと、離婚経験者の男性が再婚時に初婚女性と結婚する例が多くなったことと非正規雇用者（男性）の未婚者が増えたためだとの指摘がある。一般に、景気が悪くなると婚姻件数は減少する。婚姻件数が減少すると、結婚してから出産という社会的規範がある日本では、少子化が進むことになる。長期化する経済の低迷は、少子化にも影響を与えているのである。子育てに象徴されるように家庭を持つということは、自分以外の誰かに対して責任を持つという面倒な環境である。それよりも自分の趣味の時間や推し活を優先する現在の若者にとって、結婚などしない生活を選ぶ方がより幸せであり、景気低迷の中でもリスクを抱えずに生きやすいということである。

結婚する場合も晩婚化という状況が立ちはだかることになる。2020 年の国勢調査によると、平均初婚年齢は、夫が 31.2 歳、妻が 29.6 歳であり、東京都は、夫 32.3 歳、妻 30.5 歳と夫婦ともに 30 歳を超えた。なお、出会いから結婚までに要した期間、いわゆる平均交際期間は、4.4 年となっている。そもそも出会いの機会がないと嘆く独身男女は多い。結婚相手と出会った機会は、男女ともマッチングアプリが 1 位である。晩婚化だけでなく、晩産化も進んでいて、平均出生年齢（第 1 子）は、父 32.5 歳、母 30.7 歳である。こうなると 3 人目が大学在籍中に定年退職となる可能性があり、3 人目は諦めようということになってしまう。

ここにあげたものは、人口減少と相関関係にあるものだが、一方で完全な因果関係にあるかということこれを言い切るのは難しい。別の原因によって、二つの結果が生じている可能性があるからである。

■ 3つの数値

ここで次の 3つの数値を見てみよう。

A 3,623 万 (2023 年 9 月)

B 1,435 万 (2023 年 4 月)

C 1,591 万 (20231 年 12 月)

A は、2023 年の日本の高齢者人口である。日本の高齢者人口割合は、29.1 %で長年に渡って世界最高

であり、次いで イタリア (24.5%)、フィンランド (23.6%) となっている。

B は、0 歳から 14 歳までの年少人口、つまり子どもの数である。総人口に占める割合は、11.5%となっている。年少人口は、1982 年から 42 年連続で減少している。

C は、家庭で飼われている犬 (684.4 万) と猫 (906.9 万) の総数である。犬と猫だけで年少人口を凌駕していることになる。犬よりも人間的な反応を示す猫が増え続けていることが注目点である。つまり現在の日本人は、子どもをもうけることよりもペットと家庭を築くことを選択しているということになる。かつてのホームセンターには、乳幼児向けの衣類、離乳食、玩具の売り場があったが、昨今ではそうした売り場がペット用品売り場が変わってしまった。子ども用品よりもペット用品が売れるからである。現在の日本には、小児科医の倍以上の獣医がいることもうなずける。

■人口減少対策

これに対して日本政府は、今後百年の間に日本の総人口が壊滅的にならないようにするための方法を見つけようとしている。動機付けとなる報酬 (インセンティブ)、制度改革、社会システムであれ、日本がこの問題に取り組む方法はいくつもある。

一人で自由に生きていける社会は、それはそれで素晴らしいことである。一方で、大切な人と価値観を共有しながら生活をともにし、大切な人との間に子どもをもうけて家庭を営むことを望んでいるにもかかわらず、経済上の問題からそれがかなえられない社会は、決して素晴らしい社会とは言えない。共働きでも子どもを育てることができる仕組み、社会全体で出産と子育てを支援する仕組みが構築されなければならない。

東京都は、合計特殊出生率が 0.99 人となり子どもが生まれない自治体となっているが、東京都の人口は、表 1、表 2 のように 47 都道府県で唯一増加している。社会的移動による社会増加が多いためである。子どもが生まれるようにする社会環境づくりは全国的な問題であり、施策に対して短期間で結果が出るような話ではない。しかし東京都のように、子どもが生まれなくとも社会的施策や政策によって移住者を増やすことは

表 1. 都道府県別人口増減率 (総務省統計局)

人口増減率順位	都道府県	人口増減率		人口増減率順位	都道府県	人口増減率		人口増減率順位	都道府県	人口増減率	
		2023年	2022年			2023年	2022年			2023年	2022年
一	全 国	-0.48	-0.44	16	宮 城 県	-0.68	-0.44	31	宮 崎 県	-0.96	-0.84
1	東 京 都	0.34	0.20	17	佐 賀 県	-0.74	-0.64	33	福 井 県	-1.12	-1.00
2	神 奈 川 県	-0.02	-0.01	18	山 梨 県	-0.75	-0.43	34	鳥 取 県	-1.14	-0.91
3	神 奈 川 県	-0.04	-0.04	18	岐 阜 県	-0.75	-0.77	35	愛 媛 県	-1.16	-1.09
4	埼 玉 県	-0.08	-0.05	18	静 岡 県	-0.75	-0.70	36	山 口 県	-1.21	-1.06
5	千 葉 県	-0.15	-0.15	21	石 川 県	-0.78	-0.67	37	新 潟 県	-1.22	-1.12
6	滋 賀 県	-0.16	-0.11	21	茨 城 県	-0.78	-0.72	38	長 崎 県	-1.25	-1.06
7	大 阪 府	-0.22	-0.27	23	奈 良 県	-0.79	-0.72	39	和 歌 山 県	-1.27	-1.13
8	愛 知 県	-0.25	-0.29	24	長 野 県	-0.80	-0.65	39	島 根 県	-1.27	-1.05
9	福 岡 県	-0.26	-0.15	25	岡 山 県	-0.84	-0.74	39	徳 島 県	-1.27	-1.14
10	福 岡 県	-0.53	-0.43	26	三 重 県	-0.78	-0.77	42	福 島 県	-1.31	-1.20
11	熊 本 県	-0.55	-0.57	27	鹿 児 島 県	-0.89	-0.87	43	高 知 県	-1.37	-1.22
12	京 都 府	-0.57	-0.45	28	香 川 県	-0.91	-0.87	44	山 形 県	-1.42	-1.31
13	栃 木 県	-0.60	-0.65	29	北 海 道	-0.93	-0.82	45	岩 手 県	-1.47	-1.32
13	群 馬 県	-0.60	-0.69	30	大 分 県	-0.95	-0.68	46	青 森 県	-1.66	-1.39
13	鳥 取 県	-0.60	-0.55	31	富 山 県	-0.96	-0.87	47	秋 田 県	-1.75	-1.59

注) 人口増減率 (%) = $\frac{\text{人口増減 (前年10月～当年9月)}}{\text{前年10月1日現在人口}} \times 100$
人口増減 = 自然増減 + 社会増減

表 2. 都道府県別人口増減要因 (総務省統計局)

増減要因	都道府県名		都道府県名		
	2023年	2022年	2023年	2022年	
人口増加	自然増加・社会増加			0	
	自然増加・社会減少			0	
	自然減少・社会増加	東京都	東京都	1	
人口減少	自然増加・社会減少			0	
	自然減少・社会増加	北海道 宮城県 茨城県 栃木県 群馬県 埼玉県 千葉県 神奈川県 山梨県 長野県 岐阜県 静岡県 愛知県 富山県 京都府 大阪府 兵庫県 徳島県 香川県 福岡県 佐賀県 熊本県 沖縄県	北海道 宮城県 茨城県 栃木県 群馬県 埼玉県 千葉県 神奈川県 山梨県 長野県 岐阜県 静岡県 愛知県 富山県 京都府 大阪府 兵庫県 徳島県 香川県 福岡県 佐賀県 熊本県 大分県 沖縄県	21	20
	自然減少・社会減少	青森県 岩手県 秋田県 山形県 福島県 新潟県 富山県 石川県 福井県 岐阜県 静岡県 三重県 奈良県 和歌山県 鳥取県 島根県 岡山県 広島県 山口県 徳島県 香川県 愛媛県 高知県 長崎県 大分県 宮崎県 鹿児島県	青森県 岩手県 秋田県 山形県 福島県 新潟県 富山県 石川県 福井県 岐阜県 静岡県 三重県 奈良県 和歌山県 鳥取県 島根県 岡山県 広島県 山口県 徳島県 香川県 愛媛県 高知県 鹿児島県	25	26

可能である。

例えば、豊富な地下水や空港などの交通の利便性などをアピールして企業誘致を進めた熊本県菊陽町 (きくようまち) は、世界的半導体企業である T S M C (台湾積体電路製造)、ソニーグループ、東京エレクトロン、富士フィルムなどの大規模関連工場が次々と進出することになり、流入によって急激に人口が増え、人口増率は全国トップクラスとなっている。不動産価格も急騰している。



図 3. 熊本県菊陽町

あるいは、成田国際空港の東隣にある多古町 (たこまち) は、「待機児童 0」、「中学生までの給食費 0」、「大学生まで医療費 0」の 3 つの 0 の実現、第 3 子以降に出生・入学等祝い金総額「100 万円」を支給、公立病院での病児保育など徹底的にこだわった子育て支援策が評価され、「日本子育て支援大賞 (自治体部門)」を受賞した。これらの施策によって子育て世帯の移住者が急増し、人口が増え続けている。

フランスの合計特殊出生率は、1994 年に 1.66 人であった。この年、日本の合計特殊出生率は、1.50 人であった。その後、フランスは「家族給付による両立支援」、「育休制度の拡充」、「父親休暇の拡大」、「週 38 時間労働制」など、さまざまな出産・育児支援策を講じ、その結果 2007 年には合計特殊出生率が 1.98 人にまで上昇した。特に重要だったのは、1999 年に施行されたパートナーシップ制度 (PACS) である。これは、結婚していない 2 人が、結婚に準じた法的保護や社会保障、優遇税制などを受けることができるという制度である。

ドイツは、出生数が増えるためには女性が働きやすい環境が重要だと考え、3 歳以下を対象とした保育施設を拡充し、産休・育休中の経済的支援策である両親手当の導入・拡充をおこなった結果、合計特殊出生率が回復した。

東京都は、「TOKYO 縁結び」という婚活アプリを提供し、AI が相性の良い相手を紹介するサービスを行っている。こうしたマッチングアプリを用いた自治体の婚活は、愛媛県や大阪府など各地で行われている。

■行政の課題

以前は、地域で問題が発生すると役所や役場に相談に行き、自治体の職員が問題に対応してくれていた。しかしこれからは、税収の減少、行政組織の人員削減、管轄部局の統廃合など厳しい行財政事情の中で行政の

体制が脆弱化する。それどころか市町村数は減少の一途を辿ることになる。1999年の市町村数は、3,232であったが、2023年には、1718となった。山梨県は、「平成の大合併」で64市町村から半分以下になり、現在、13市、8町、6村の27市町村となっている。こうなると、行政の課題解決力や対応力は下がり、住民組織やNPO、大学、企業のCSRなど多様なプレーヤーが、行政が担ってきた役割を担当することになる。移住者の1段階前の関係人口を確保してプレーヤーになってもらうことも考えなければならない。こうしたプレーヤーが協働して地域課題に立ち向かう「ネットワーク型行政」、「住民自治組織」が、今後の地域課題解決の主体となる。そして、こうした活気ある地域には、人が集まってくるようになる。

例えば長野県の小布施町は、小布施町に縁もゆかりもない18歳から35歳の若者が、二泊三日で小布施の地域課題についてアイデアを出し合う「小布施若者会議」を開催している。初年度の2012年には、全国から240名の参加者が集まった。こうして小布施の関係人口を増やし、移住者を増やしている。1970年代から始まった「小布施まちづくり」の第3ステージ「次世代が中心となって進める人口減少社会を前提とした新たなまちづくり」に沿って行っているものである。このように「よそ者」や「若者」がまちづくりの主体となる時代が到来している。



図4. 小布施若者会議

■山梨県への影響

日本の人口減少問題は、地方にも多大な影響を及ぼすことになる。人口減少によって多くの地方自治体が存続の危機に立たされることになる。

山梨県は東京都と隣接しており、首都圏整備法によっ

て「首都圏」と位置づけられている。こうした地理的条件から東京都内に通勤・通学する人も多く、こうした人々は「山梨都民」と呼ばれている。特に上野原市、都留市、大月市、甲州市、笛吹市から東京都に通勤・通学する人が顕著である。こうした山梨都民の中には、大学進学や就職・転職の際に東京都や神奈川県に移り住んで行く人たちがいる。いわゆる社会的移動と言われる現象である。人口が減少した場合、さらに東京都への転出が増加する可能性がある。

山梨県は、富士山、南アルプス、八ヶ岳という日本を代表する山岳を擁し、富士箱根伊豆国立公園、秩父多摩甲斐国立公園、南アルプス国立公園という3つの国立公園を持つ自然環境に恵まれた県である。しかし、地理的環境や自然環境以上に恵まれているのは、山梨県の社会環境である。人口は80万人弱と小規模であるが、武田信玄の「人は城」や「情けは味方」という思いが現代の山梨県民にも受け継がれていて、人のつながりやネットワークを重視する傾向がある。相互扶助の金融版である「無尽」という地域共同体が残っていたり、15歳以上のボランティア活動行動者率が全国1位になったりすることからもわかるように、誰かのために役に立ちたいという気持ちを持ち、人とのつながりを大切にすることが山梨県民の特徴でありミームである。ミーム (meme) と、は社会の遺伝子、文化の遺伝子のことで生物学の分野で用いられていた言葉である。生物の脳から脳へ複製可能な「社会・文化に関する情報」の単位のこと、日本語では「社会的遺伝子」、「模倣子」、「意伝子」などと呼ばれている。

人口10万人当たりの公民館数や図書館数も全国1位である。通勤時間が短く、家庭で食事に費やす時間も日本一である。「ないものねだり」をやめて、こうした山梨の「あるものさがし」に基づく活動、つまり山梨の社会環境と向き合い、それらを活用する活動が地域社会には求められている。

■人口減少による影響

出生数の減少は、20年後の労働力不足と直結している。長年続く出生数の減少により、日本ではすでに人口減少の影響が出始めている。顕著な課題は、さまざまな分野や職種で労働力が不足することであり、今後

は悪化の一途を辿ることになるだろう。

アメリカでは、労働力を増やす方法として移民の受け入れが活用されてきたが、日本はその方法を選んできた。今後、移民を積極的に受け入れるかどうかは、賛否が分かれる難しい問題である。移民が増えると、一般的に犯罪率や失業率が上がる。また日本では、アメリカやヨーロッパで見かけるような、街中で薬物中毒者が徘徊していることはない。移民を積極的に受け入れてきたスウェーデンやフィンランドなど北欧の公衆トイレは、静脈に薬物注射をさせないようにブルーライトが灯っている。移民と薬物接種は、必ずしも因果関係とは言えないが、いずれも現在の日本ではありえないことである。警察官や自衛官も減少することになるが、こうしたさまざまな未知の課題と向き合っていくことになる。

労働力の不足は、少子化、超高齢社会、働き方の多様化などの複合要因により、特に医療、教育、介護、IT、物流、農業、漁業の各業界・職種で深刻化するとされている。政府や企業は対策を検討しているが、長期的な人口減少問題が根底にあるため今後も日本の課題となり続けるであろう。

また労働人口が減少すると、多くの高齢者を少ない人数で支える社会構造ができあがる。こうなると現役労働者の税金や社会保険料が上昇する。このままのペースで少子高齢化が進んだ場合、2060年には高齢者1人に対して現役世代が1人という割合で、高齢者世代を支えることになる。給与から社会保険料を差し引くとわずかな金額しか残らない時代がやってくる。

今後は、女性、高齢者、障害者、外国人が就業できる環境を整え、すべての人が総活躍する社会を実現しなければならない。近年、女性、高齢者、障害者、外国人の就業率は上昇しているが、これを進展させなければならないだろう。

労働力不足の他にも、人口減少によって消費激減、社会保険料の増額、自治体消滅、介護難民、空き家問題などが社会の重要な課題となる。特にコンクリートを使用している高速道路や上下水道などのインフラが劣化してくるが、工事をする人が不足し、税収も不足するので修繕することができなくなる。こうして都市は、廃墟となっていく。現在も新しい高速道路が建設、

計画されているが、今後の人口減少を考えれば推奨できる予算の使途ではない。

■定年退職年齢の問題

人口減少による労働力不足を抑える方法の一つが、定年退職年齢の撤廃である。日本の定年退職年齢は、昔は55歳であったが、1994年の高年齢者雇用安定法の改正で60歳未満の定年が原則禁止になり、60歳定年制が主流になった。2013年には高年齢者雇用安定法が改正され、定年が60歳から65歳に引き上げられることになった。現在はその経過措置期間で、2025年4月から65歳定年制はすべての企業の義務になる。企業はそれまでに「定年制の廃止」、「定年の引き上げ」、「継続雇用制度の導入」のいずれかを実施しなければならない。さらに70歳までの就業機会確保を企業の努力義務とする高年齢者雇用安定法の改正案が閣議決定されており、定年延長の流れは加速していくことになる。

一方、海外の動向だが、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドでは、定年制を禁止している。アメリカでもパイロットやバスの運転手など一部の職種を除き、定年は禁止されている。フランス、ノルウェー、アルゼンチンには定年制があるが、70歳である。スウェーデンでは、69歳、フィンランドは68歳が定年である。こうした諸外国の例から見ても、日本の定年延長の流れは必然と考えられる。なお定年年齢が上がると老齢年金の支給開始時期も引き上げられることになるかもしれない。

■人口減少による負荷の軽減とメリット

日本の人口は、減少が続いており、2070年には総人口が9,000万人を割り込み、高齢化率は39%の水準になると推計されている。また、団塊の世代の人々が75歳となる2025年には、75歳以上の人口が全人口の約18%となり、2040年には65歳以上の高齢者人口が総人口の35%になると推測されている。

一方で出生率が低下し、人口が減少することによって発生するメリットもある。人の数が減って経済活動が落ち着けば、エネルギー消費量も低下する。交通渋滞も減少する。環境への負荷を軽減できる可能性もあ

る。また食料自給率が低い日本にとって、食料需要の減少もメリットの一つと言える。住居や教育費の負担も軽減され、生活レベルを向上させることができるかもしれない。進学も倍率を気にせず行きたいところに行ける可能性もある。同級生も少人数になる。最も影響を受けるのは、就職活動である。すでに多くの地方自治体が教員採用試験を大学3年生向けに実施し、大学2年次に内定を出す企業も出てきているが、就職は売り手市場となっていく。週休3日や年3回の賞与も当たり前になるだろう。待遇や福利厚生を改善できない企業は、人が集まらなくなる。

その他、人口減少によって、多くの大学や店舗が淘汰されていくことになるが、反対に需要が増える分野もある。その一つが、パブリック・アウトリーチ(Public Outreach)分野である。訪問してサービスを提供する活動である。アメリカでも特に高齢化が進んでいるフロリダ州にあるフロリダ電力は、1982年から大型トラックを改造してつくった「クオリティ・シニア・リビング・バン」を使ってアウトリーチ活動を行っている。食料品から大工道具、時には歯科医や美容師までを載せて各家庭をまわるのである。こうしたアウトリーチは、日本でも山間部などの集落で見かけるようになったが、人口減少社会では、重要な役割を果たすことになる。

また、ネットショッピングも発展するであろう。賃貸料を払って店を出しても来店することができる地域在住者が減ってしまうことになる。そのため近隣住民ではなく、遠方に住む顧客に向けた商いやサービスが、重宝されることになる。

■空き家の増加

人口が減少すると空き家が増える。2023年に総務省が実施した住宅・土地統計調査によれば、全国の空き家数は、900万戸となり、空き家率は、13.8%となっている。山梨県の空き家は、8万7千戸であり、空き家率は20.5%で全国4位である。山梨県は、富士山や八ヶ岳という自然環境に恵まれた地域を中心に個人や法人の別荘地が広がっているが、こうした別荘が景気の減退に伴い空き家となっている。また景気が良かった時期に投資目的で建てられたアパートが、人口減少

時代となった現在では、空き家率を引き上げる要因になっている。前述の住宅・土地統計調査によれば山梨県は、「二次的住宅(別荘等)」の比率が4.0%で長野県に次いで第2位であり、この二次的住宅(別荘等)の空き家が多いのが特徴である。

2017年のアメリカの住宅流通量のうち、82%が中古住宅であり、新築住宅は18%にすぎない。このようにヨーロッパやアメリカでは、住居といえば中古住宅であるが、日本には、新築神話というものがある。2017年の住宅流通量のうち、86%が新築住宅であり、中古住宅は14%にすぎない。両親の住んでいた家があるにもかかわらず、新築の家を別のところに建てて住む人たちは多い。また自宅よりも職場に近いマンションに住む人たちもいる。こうして空き家は増えていくことになる。山梨県は、持ち家率が70%と全国平均の61%よりも高く、一戸建ての割合が75%と全国平均の49%を大きく上回っている。持ち家に対する執着心が高いと言える。一方で、地価や建築費の高騰により新築物件は、高価になっている。そして、新築物件の価値は、登記した途端に下がり始める。

中古物件を安く購入して自由にリフォームやリノベーションを行ったり、自分たちでDIYしたりすれば、リフォーム費用やリノベーション費用と物件費用をトータルしても、新築の注文住宅より低価格で理想の住まいが実現する。建築後50年が経過した伝統工法の住宅を古民家というが、古民家には、現在では手に入らない貴重な材木を用いている家屋も多い。空き家を負の遺産と考えるのではなく、住宅を安価で手に入れることができるプラスの遺産ととらえ、再活用することが今後の地域課題となる。

■労働力不足とリスクリング

日本は、長らく続いたデフレーションの出口にいない。今後、慢性的な人手不足とそれに伴う賃金水準の上昇時代がやってくる。今後の地域社会は、人手不足を解消するためのあらゆる手段を試みることになる。生成AIやIoT(モノのインターネット)、ロボティクスなどデジタル技術を用いたサービスも社会に浸透していくことだろう。

また、地方にとって生産年齢人口の減少による労働

力不足をリスクリングが補える可能性がある。同時に地域課題解決や地域経済の活性化につながる。地場産業の担い手は高齢化し、後継者不足が喫緊の課題となっている。帝国データバンクの全国企業後継者不在率動向調査(2023年)によれば、全国・全業種の53.9%の企業で後継者がいない状況となっている。リスクリング対象の関係人口が、地域で地場産業の担い手・プレイヤーとなり、新たな発想を持ち込むことで、地域の労働力不足や地場産業の後継者不足などの課題を解決できれば地域経済の活性化にも貢献できる。

大学コンソーシアムやまなしでは、地域課題の解決を目的としたプレイヤーを集め、お互いの情報やナレッジの集積や共有ができるプロジェクトのプラットフォームを形成することで地域課題解決を支援していく。

■地域課題

地域活性化は、人のつながりやネットワーク、歴史文化の再確認などの活動をする「まちづくり」と重なっている。地域にある人的資源(ソフトウェア)を対象とする活動である。これに対して、建物や道路などのハードウェア面を整えることを「街づくり」と呼ぶ傾向がある。また衰退した地域の復興を目指す再生活動は、「まちおこし、地域おこし」と呼んで区別している。地域課題の解決のための活動は、まちづくりの一環であり、地域のあらゆる社会的な活動が対象となる。

地域課題の具体的な内容としては、関係人口の誘致、ブランディング、子育て支援、介護など多岐にわたるが、具体的な解決方法としては、以下のような事例が考えられる。

- ・地域資源の発掘、地域振興計画の策定
- ・コミュニティの構築・再建
- ・気候変動への適応と炭素排出量の削減
- ・地域のマップづくり、地域のガイドブックづくり、インバウンド向けガイドブックづくり
- ・地域課題解決に向けたフィールドワーク調査
- ・地域ブランドづくり、地域商品開発、まつりやイベントの開催
- ・商店街活性化策の検討、アンテナショップの開設、
- ・二地域居住者・多拠点居住者の支援

- ・ガイドツアー・ツーリズムの計画と運営、農家民宿・民泊の支援、外国人住民への情報提供
- ・空き店舗の活用、空き地・空き家の活用、マルシェ・フリーマーケットの開催
- ・格差社会や社会に参加できない人への支援
- ・環境保全活動、環境影響調査、環境教育ワークショップの開催
- ・グリーンツーリズム、ワインツーリズムなどツーリズムの開発
- ・オリエンテーリングツアー、フードハントツアーなどの開発
- ・高齢者教室の運営、高齢者向けライフレビューワークショップの開催、移動手段の確保
- ・介護者支援、ダブルケアの実態把握、障害者支援
- ・地域伝承文化の保存継承、まちなか美術館の取り組み、まちなかコンサートの開催
- ・子ども食堂の運営、食品ロス削減の取り組み、宅配弁当の実践
- ・放課後子ども教室の運営、子ども地域塾の運営、中学生・高校生の居場所作り
- ・避難所・災害援助活動
- ・自主防災組織の設立と運用、防災マップづくり、防災訓練の計画、防災の手引きづくり
- ・SDGs推進の啓発活動、感染症対策の啓発活動
- ・男女共同参画推進活動、家族経営協定策定の支援
- ・ホームレスに対するポジティブな支援策
- ・職場の心理的安全性の支援
- ・土地改良区の支援、拡大する竹林への対応
- ・ペット飼育者のコミュニティづくり
- ・ごみの減量化と資源化
- ・過疎地の移動手段
- ・公共交通としてのライドシェア
- ・山間地におけるオンデマンドバス
- ・ナイトライフエコノミー
- ・生物の生息地保護
- ・地域クラブ活動(中学校の部活の指導者、活動場所)
- ・コロナ禍で生じた歳出構造の改善などである。

これらの中でも山梨県は、2003年から20年に渡って空き家率全国1位となっており、地域コミュニティ

の存続に関わる重要な課題となっている。人口減少時代に空き家が増えるのは、因果関係のある事柄であり、避けることのできないことである。空き家問題については、今年度から課題部門として別枠でプロジェクトを募集することになった。

■学生イニシアティブ事業

特定非営利活動法人大学コンソーシアムやまなしは、山梨県内 12 大学と地域社会との連携・協働組織として単位互換事業、留学生支援事業、高大接続事業、クラウドファンディングなど様々な事業を行っている。学生イニシアティブ事業は、地域社会活動支援事業の 1 事業である。

域学連携事業は、大学教員が主導し学生は労働力となって教員の指示に従うものが一般的であるが、大学コンソーシアムやまなしの学生イニシアティブ事業は、基本的に大学教員ではなく学生が主体者となって計画し、実践する点に特徴がある。アクティブ・ラーニングを支援する事業でもある。2010 年度(平成 22 年度)から実施している。

2005 年の秋、イギリス南部の小さな町トットネスで、トランジションタウン運動が始まった。

トランジションタウン運動とは、地域課題に対して、地域住民自らが課題解決に向けて考え、関連団体、企業、行政などと協働しながら行動する市民運動のことである。いま暮らしている地域を、より暮らしやすく、誰もが参加できる持続可能な場所に変えていくこと(transition)を目指す世界的な市民活動である。学生イニシアティブ事業は、トランジションタウン運動の学生版である。

(1) 問題の所在と目的

現在の地域社会には、まちづくりや地域活性化などの相互扶助に若年層(15～34 歳)の参加が得られないという課題が存在する。そして、この課題を解決しなければ将来の社会を支える中年層(35～64 歳)による持続的な地域活性化や新たな発想による展開は期待できない。

学生イニシアティブ事業は、学生がイニシアティブ(主導権)を発揮し、地域社会との連携・協働により主体的に企画・実施するまちづくり・地域活性化事業を

通して、学生と地域社会との新たなつながり(ネットワーク)を生み出すことをその目的としている。

(2) 募集対象

山梨県内の 12 大学の学生に地域社会との連携・協働事業について企画提案の募集を行う。個人による活動ではなく、3 名以上のグループでの活動とする。

(3) 助成対象経費と助成金額

助成対象経費は、交通費(旅費を含む)、消耗品費、施設使用料、印刷費、保険料などであり、活動に関わる経費であれば柔軟に対応する。助成金額については、上限 3 万円として補助する。また、#やまなしクラウドファンディング(<https://camp-fire.jp/curations/yamanashi>)を活用する場合、手数料を通常の 17% から 14% に割り引く優遇措置を受けることができる。

(4) 選考方法

2023 年 6 月に申請書の書類審査を行い、申請した 11 プロジェクトのうち 9 プロジェクトが支援プロジェクトとして選定された。選定されたグループは、活動に必要な経費の補助(3 万円)を支給される。また選定されたグループは、活動経過を SNS などで公開することになる。

審査は、成果発表、活動過程について、

- ①問題意識(地域課題の明確化、活動目的、問題解決の方法など)
- ②実践力(計画に沿った実践力、地域の人との協働力、課題発生時の改善力など)
- ③地域貢献力(目標に沿った実績、地域貢献力、今後の持続可能性など)
- ④プレゼンテーション力(表現力、構成力、コミュニケーション力など)

の 4 つの観点によって行われた。

(5) 単位取得

このプロジェクトは、山梨大学の単位互換科目「自発的教養科目(実践的キャリア形成活動)」として、各々の所属大学で単位互換認定(2 単位)を受けることができる。

■2023 年度学生イニシアティブ事業成果発表会

2024 年 2 月 12 日(月)に大学コンソーシアムやまなし・地域社会活動支援事業委員会主催による

2023 年度学生イニシアティブ事業成果発表会が、山梨県立図書館イベントスペースで開催された。当日の参加者は、68 名であった。



図 5. 成果発表会会場

学生イニシアティブ事業は、大学生が中心となり地域課題についてグループで取り組む域学連携事業である。今年度は、2023 年 6 月に書類審査が行われ、9 グループに活動補助金(3 万円)が支給され、2024 年 2 月まで地域社会活動を行ってきた。実践活動の成果発表会はすべてのグループが、問題の所在、活動の目的、課題解決方法、成果、今後の課題などについて、パワーポイントを用いて工夫を凝らしたプレゼンテーションを行った。

長時間にわたる審査とアドバイスをご担当いただいたのは、

- 岩田 遥 (RENSA 合同会社代表: 審査委員長)
- 金丸 滋 (株式会社アルプス代表取締役社長)
- 曾根原 久司 (特定非営利活動法人えがおつなげて)
- 樋田 洋樹 (山梨県観光文化・スポーツ総務課長)
- 船木 上次 (萌木の村株式会社代表取締役村長)

の 5 名の方々です。いずれもまちづくりや地域振興に造詣の深い専門家の方々である。

審査員からは「問題解決を考える時にやさしさだけで計画を立てること、アウトリーチして計画するのでは大きな差がある。ぜひ、現場に行って問題点を模索して欲しい」、「昨年の反省点を踏まえ、今年度は大きな進歩がみられた」、「活動に対してリサーチ活動がよくできている、5 年を見通してのシミュレーションができていることは、大変評価できる」、などの感想が

寄せられました。また、どのプロジェクトが最優秀賞になってもおかしくないごく僅差の審査結果であったことも付記しておきます。



図 6. 発表の様子

- なお、発表を行ったのは以下のプロジェクトです。
- ・文化財を点でなく面で捉える。地域の魅力発信マップづくり(山梨県立大学)
 - ・Uターンで選ばれるまちの魅力発見・発信(山梨大学)
 - ・山梨英和大学附属図書館学生協働サークル LIKE “らくいん文庫” 実行委員会(山梨英和大学)
 - ・マスカット・フォトロゲイニング(山梨学院大学)
 - ・大月桃太郎プロジェクト～夢と未来のページ～(山梨県立大学ほか)
 - ・つるっ子プロジェクト実行委員会(都留文科大学)
- ※奨励賞
- ・難民支援サークル Good Samaritans(山梨英和大学)
- ※最優秀賞
- ・秋の清里×さつまいもプロジェクト(山梨県立大学)
 - ・空き家リノベーションプロジェクト「結」(山梨大学ほか)
- ※優秀賞



図 7. 表彰式の様子

甲府市文化財保存活用地域計画

文化財を点ではなく面でとらえる地域の魅力発信マップ作り

掛川 紗帆・白鳥 霞・名取 沙羅・森屋 紫苑・山中 えりか・山下 実咲希・佐野 歩夢・古屋 莉菜・佐藤 麗乃・馬場 麻純 (山梨県立大学)

1. 概要

当プロジェクトは、甲府市で作成され、文化庁の認定を受けた「甲府市文化財保存活用計画」(以下「地域計画」)を習った、文化財の活用・保存とこれに準じた文化財マップの作成を目標としている。

作成した地図は紙媒体に印刷し、地域振興の手段として使用されることに期待して開発する。また、完成したものは甲府市内に点在する観光施設や公共施設で無料配布を行う。

2. 甲府市の文化財

(1) 甲府市の現状

日本では、2019年3月4日に地方公共団体が「文化財保存活用地域計画」を作成する際の基本的な考え方や留意事項などを指針として取りまとめた資料が文化庁より公表された。これには官民一体となり、地域総がかりで文化財を守り、活かし、伝える体制の構築を図り、文化財の存続につなげていくことが狙いとされている。甲府市もこの流れに沿い、地域計画を作成し2022年12月16日に文化庁より認定を受けている。甲府市が作成した地域計画の中に「今昔の『交ひ』が紡ぎ出す歴史文化継承のまち 甲府」という将来像が設定されている。

「交ひ」が生み出す歴史文化の継承、そして「交ひ」の歴史が生み出す新たな「交ひ」。それが文化財の保存と活用の好循環を生み出す原動力であり、人・まち・自然が共生する未来創造都市の基盤である。

(甲府市文化財保存活用地域計画【山梨県】)

上記の文章に頻出する「交ひ」には山梨県の以前の呼称でもあった、「甲斐」という地名の語源ともなった説がある。山梨県にゆかりを持つ「交ひ」を目標として設定することで、文化継承に馴染みを持ってもらおうとする目的がある。

また、目指すべき将来像と基本方針が地域計画の中

に盛り込まれている。4つのファクターから構成されており、以下のようにまとめられている。

- ①. 文化財保存の推進
- ②. 文化財を活かすしかけづくり
- ③. 文化財を活かしたまちづくり
- ④. ひと・組織のつながり

(2) 問題の所在

課題点も同様、地域計画に記載されている。文化財の保全についての分析や活用の方法など多角的な視点から精査が行われている。この意向に沿った取り組みが甲府市と足並みをそろえ、地域振興の実現に近づくことができると考え、安達ゼミでは活動に取り組んだ。私たちが関係を持ってそうなファクターを探り、議論の末、「③. 文化財を活かしたまちづくり」に焦点を置いたさらなる深堀を行い、学生視点から見える潜在的な課題点を整理することにした。以下がゼミ内で挙げられた課題点である。

<文化財が抱える問題>

- ・甲府市文化財の保護・活用が不十分
- ・文化財活用コンテンツの魅力が不十分のため、文化財自体の魅力が半減してしまっている
- ・文化財=堅い、難しいというイメージの払拭

<まちが抱える問題>

- ・甲府のまちの回遊の仕組みが不十分
- ・魅力はあるが知られていない場所が沢山ある

甲府市が打ち出した地域計画とはまた異なった分析を学生視点で行うことができた。現状では、廃れる一方の文化財に対し、何かしらのアプローチを掛けることの必要性を共有することができ、問題の所在を確認することができた。歴史ある文化財の存在。魅力に触れずに無くなっていくことは甲府市における大きな損失である。

3. 活動の目的

(1) 文化財が抱える重大な問題点解消

近年コロナが影響したこともあり、巣ごもり需要が拡大した。外出の機会が少なくなり、元来より少なかった文化財に触れる機会がさらに減少してしまった。甲府市に点在する文化財を有効活用し、前述の課題点を少しでも減らすことが重要な目的の一つであると考え。

(2) 「交ひ」の中心としての甲府を取り戻す

過去には多様な文化を有し、様々な場所へと行くための経路地として栄えていた甲府市が衰退の一途を辿ってしまっている。かつての栄華を取り戻すために、対処(当プロジェクトではマップ作成)していく甲府市に賛同し、ともに動いていく目的がある。

(3) 能動的なまちあるき

文化財に限らず甲府市には魅力のある場所がごまんと存在する。そこに興味を持ってもらう一つのきっかけをマップの提供によって確立し、甲府市に対して今以上の地域愛を育ててほしいという思いがある。

4. 方法(企画・提案) + α

「交ひ」の中心としての甲府に助力のために文化財の浸透に一役買うマップ作成に従事することを決定した。主な実施方法は以下の通りである。

1. 甲府市に存在する文化財への理解
2. マップ作成のための準備
3. 文化財・周辺施設への取材
4. マップ作成
5. マップ印刷・配布
6. アンケート集計・プレゼント配布

当活動は、毎週金曜日の講義時間帯に活動時間を設定する。また、甲府市教育委員会生涯学習室歴史文化財課様・JAF(一般社団法人日本自動車連盟)様(以下敬称略)に協力を仰ぎつつ、活動を進める。

5. 活動内容

(1) 城下町エリア フィールドワーク

地域計画を主導し、甲府市の文化財に造詣の深い「甲府市歴史文化財課」が主催するまちあるきに参加した。



図1. まちあるきの様子

甲府市文化財保存活用地域計画

文化財を点ではなく面でとらえる地域の魅力発信マップ作り

これを当ゼミの出発点として設定し、甲府市に点在する文化財への理解を深めることを目的として行われた。文化財や歴史的な箇所を見て回る中で町中に存在する潜在的な価値について気づくことができた取組であった。

知見のある市役職員が先導し、チェックポイントを通過するたびに、立ち止まり解説を繰り返し、ゴールを目指していった。説明を受ける中で初めて知る事が多かったことや何も無いようなところ（駐車場や跡地）で立ち止まり、面白い歴史を有していることの発見は当プロジェクトにおける大きな収穫であった。

(2) 文化財と周辺施設下調べ

ゼミ内でどのエリアを取り扱うのかを話し合うこととした。プロジェクトの目的に照らし合わせ、文化財の活用を実現するために甲府市の中でもとりわけ文化財が集約している「善光寺エリア」と「湯村エリア」を選択することとした。2つのグループに分かれ、それぞれのエリアを担当し、2つのマップを作成するための足掛かりとして下調べを始めた。

文化財を紹介することを主としたマップはありきたりだという意見の元、飲食店などを盛り込んだマップ

を作成するというビジョンをここで共有することができた。マップを見た人に能動的なまちあるきを体験してもらおうことを目標として、設定することができた。

目的の達成のためマップに文化財や歴史ある建造物を主として掲載することは間違った選択ではない。しかし、それでは歴史にあまり興味がない人の存在を蔑ろにしてしまう。そんな人でも、興味を持てるコーヒショップやパン屋などの場所を文化財と合わせて掲載し、周辺施設に立ち寄った際についでに触れる機会を提供できるマップ構成を考案した。

(3) 文化財と周辺施設取材

マップを作成する前段階として、実際にピックアップした文化財と周辺施設に訪れることにした。ここで行った取り組みの目的としては、甲府市に眠る魅力を発見することはもちろんとして文化財や周辺施設を管理・運営する方々との関係性を構築することである。後々、マップに掲載許可をいただけるような狙いを包含しつつ、各地点へと足を運んだ。

出向くスポットには基本的に管理者や経営者がいたため、事前にアポイントメントを取り、円滑な取材が行えるような努力をした。実際に観賞を行うことで得

ることができるものがあつたのは確かであるが、取材を通してでしか得られなかったものがあり、そこにあるものに対する見方を広げることに一役買っていた。現場に携わっている人から発せられる声の大切さを知ることができた取組であったとともに、マップ作成における大きな進歩となった。

(4) プレゼント選定

当初はマップを作成し、それを頒布することで目的の達成を狙っていた。しかし、私たち自身が文化財に触れ、造詣を深めていく中で、文化財のみを紹介するマップの存在意義に疑問を抱くようになっていった。そのため、文化財の周辺施設に目を向けるに至ったのであるが、それだけでは何かが足りないと感じてい

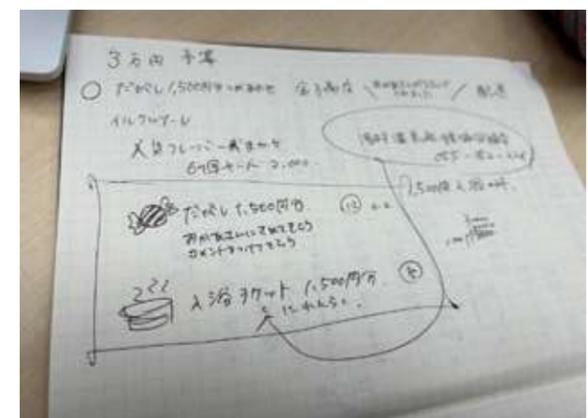


図4. プレゼント企画草案

た。そんな矢先、JAF からマップ作りに興味を抱いたからと、資金援助をしてくれるとの呼び声がかかった。渡りに船ということで快い返事をさせていただいた。

こういった経緯で当活動は、市役所のほかに JAF の協賛を仰ぐことができた。甲府市役所の知識面におけるサポートに対し、JAF は資金面において力添えをしていただいた。資金面で余裕が生まれたことで文化財マップを利用したプレゼント企画を実施することができた。文化財の少し伝わりづらい魅力をより効果的に伝播させていくための一手段としてこれ以上のものはないと考え、マップに追加要素としてアンケート・クイズを盛り込んだ。各マップに掲載されているQRコードよりアンケートに回答することでプレゼント抽選に参加できる企画を盛り込むことにした。現在、予想以上の回答数を得ることができている。

(5) マップ作り

これまで培ってきた知識や経験を盛り込んだマップ作りに着手した。使用した編集ソフトは PowerPoint や Photoshop など様々なものを使用してきたが、試行錯誤の末、Canva を使用することとした。パワーポイントよりも多機能であり、比較的安価で見やすいUIということもあり、編集初心者の私たちにうってつけだったためである。

文化財ということで「和」を主軸とした構成を考案し、着手した。内容としては、私たちが「面白い、興味深い」と感じた要項を盛り込むこととした。営業時間や簡単な場所を記載した後、その場所に行ったことがある私たちだからこそ書ける一言コメントを盛り込んでいった。プロトタイプが作成できた時には各地点へと掲載許可や修正案をもらいに出向いた。夏ごろから時間をかけることで計2つのマップを作成することができ、2023 年末には印刷を可能にする段階まで進行させることができた。各チーム内で完成形を共有しあい、早めの完成を実現することができた。

文化財だけでなく、周辺施設もバランスよく掲載した当マップは歴史に興味の薄い人に対するアプローチを可能にした。

(6) 印刷・マップ配布

完成したマップを利用するフェイズまで移行した。印刷は甲府市にある株式会社デジタルビジョンに依頼した。各マップ 1000 部ずつ（計 2000 部）印刷し、それぞれをこちらで選定した箇所に配布することとした。以下が配布を行った箇所である。

<主な配布場所>

- ・山梨大学
- ・湯村自動車学校
- ・寺崎コーヒー
- ・善光寺
- ・ハーパーズミル
- ・かいてらす
- ・五味醤油
- ・とりいち
- ・山梨県立図書
- ・甲府駅観光案内所
- ・甲府市役所
- ・茶愉ひねもす
- ・パン工房榮や
- ・金子商店
- ・戸井商店
- ・アラキ精肉店



図2. 善光寺エリアマップ草案



図3. 文化財取材の様子

甲府市文化財保存活用地域計画

文化財を点ではなく面でとらえる地域の魅力発信マップ作り

12月より配布を開始した。アンケートを回答した人(2024/02/06時点)の中で約30%の人が「たまたま視界に入ったから」と回答していたため、配布先は適切であったといえる。

(7) アンケート集計・プレゼント配布

マップに盛り込んだプレゼント企画に伴う集計結果についてまとめる。アンケートやクイズ自体は2月末が締め切りのため判明している現時点(2024/02/06)の結果を用いる。

アンケート結果は30件もの回答が寄せられた。6つの問いを設けたが、興味深い一部を抜粋し挙げる。文化財のほかに周辺施設も盛り込んだ効果が「Q3. マップを見て初めて知った場所はどこですか。」という設問で明らかになっている。潜在的な魅力を有していた文化財はもちろん、周辺施設に寄せられた興味が目的3の達成に寄与している。

また、「Q6. 年代をお教えてください。」という設問に注目すると、40代の方が若干多いように見受けられるが、幅広い年齢層の方がマップないしは、文化財に興味を示していることの証左である。目的1、2の達成に大きく貢献していると言える。

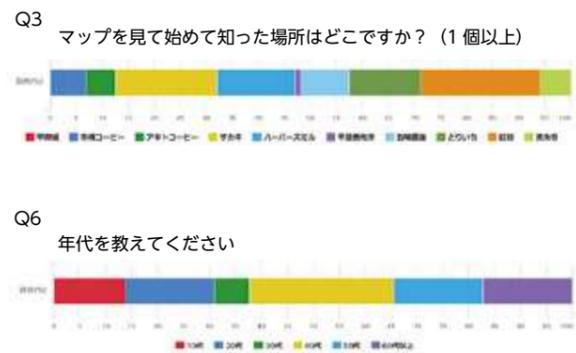


図5. アンケート結果 (2024/02/06時点)

(8) 山梨日日新聞の取材

マップ完成後に当ゼミの活動に興味を抱いた山梨日日新聞に取材を受けることになった。狙った活動ではなかったが、私たちの活動理念や経過を記事してもらい、文化財に興味を持つ層の拡大につながると考えた。



図6. 山梨日日新聞 安達ゼミ記事

6. 成果と課題 (地域への提言)

山梨県立大学安達ゼミナールによって取り組まれた文化財を通じた地域活性化プロジェクトであった。令和5年度より始まった当プロジェクトは、市との連携によるフィールドワークの開催や JAF (一般社団法人日本自動車連盟) との協賛を得ることで目標の達成に努めてきた。

マップの効果は実験段階ではあるが、現時点におけるアンケートや消費数を見ていると限りなく成功(目的達成)に近い仕上がりになったのではと感じている。これからも継続的な利用を試みていく。

今後の課題としては、地域計画の一部分にのみ注目してきたプロジェクトだったため、他の要項を満たせる成果物の作成に取り掛かることが重要である。文化財の継承に焦点を当て、地域計画に則した活動をしていくことが重要である。

甲府市文化財保存活用地域計画
—甲府市・甲府市教育委員会発行—



<頒布した実際のマップ>



図7. 善光寺エリアマップ

<活動の様子>



図9. 東光寺町稻荷神社のサカキ



図8. 湯村エリアマップ



図10. 安達ゼミ集合写真

Uターンで選ばれる まちの魅力発見・発信

渡邊 すみれ・佐野 美優・竹花 千尋・矢野 郁穂・櫻井 駿（山梨大学）

1. 概要

Uターンとは従来「地方出身者が都市部へ移住した後で再び地方へ移住すること」をいう。これに対して、富士吉田市への訪問を通じて感じた現状や課題から、「地域に関わった人がその地域に継続的に関わり続けること」をUターンと定義し、【富士吉田市におけるUターン者＝関わりを継続させる人】を増加させることを目的としてプロジェクトの活動を行った。

2. 問題の所在

現状として、富士吉田市にはいわゆる総合大学がないにもかかわらず、市と大学の連携協定をベースにさまざまな学生による研究やプロジェクトの活動が活発に行われている。しかし、学生の多くは東京から訪れていることから、前述したような活動が終了した後は富士吉田市に行く機会や地域との繋がりが消えてしまうことが課題となっている。また、せっかく同じ地域で活動していても、大学間の垣根を超えた学生同士のつながりがあまり見られず、地域内に独立したプロジェクトが散在していることも富士吉田市が抱える課題として挙げられる。

3. 目的

現在富士吉田市で活動している大学生と、過去に富士吉田市で活動を行っていたOB・OGをターゲットに設定した。学生同士が交流しながら、お互いの活動を知ることができるような機会を提供することで簡単にはなくならない「人とのつながり」を創り、そのつながりによって富士吉田市での持続可能な関わりを創出することを目的として活動を行った。

4. 方法

(1) 他大学のイベントに参加する

(2) 各大学から収集した情報をもとに資料作成

(3) 富士吉田市で活動する学生の交流を目的としたイベントの開催

(4) SNSでの情報発信

5. 活動概要

本イベントを開催するにあたり下記のスケジュールで企画・運営を行った。

- ・ 6月 富士吉田定住促進センター、地域おこし協力隊の方々と Zoom 会議
- ・ 7月 慶応義塾大学 SFC の方々とイベントに向けた Zoom 会議
- ・ 8月 富士吉田まろろオープニングイベント参加、富士吉田市役所訪問、慶応義塾大学 SFC のイベントに参加
- ・ 9月 KURA HOUSE 夜市参加
- ・ 11月 東京大学イベント参加、12月のイベントに向けた定期ミーティング
- ・ 12月 イベントの開催『ふじよしだ大学開校式』
- ・ 1月 SNSでの情報発信

6. 活動内容

(1) まろろオープニングイベント参加

2023年7月29日に、富士吉田市で活動する大学生の拠点となる場所としての活用が見込まれる「まろろ」のオープニングイベントにゼミ生2名が参加した。このイベントでは、まろろの具体的な活用方法やリノベーション方法などについて、実際に建物内や周辺を歩きながら自分たちの活動と絡めつつ考え、学生同士で意見を出し合っ話し合った。また、地元でとれた苺や吉田のうどんなど一風かわった具材を使った富士吉田市を感じる流しそうめんを行うなど、学生同士の交流も活発に行われた。イベント終了後には、それ



図1. オープニングイベント参加者集合写真

ぞれ富士吉田市内のカフェに行ったり温泉に行ったりするなど、参加した学生同士のつながりも順調に創出できた様子も見られた。当日は、私たち山梨大学のほかに、東京大学、東京理科大学、慶応義塾大学 SFC、都留文科大学など、各地域の大学から20名以上の参加者が集まった。

(2) 慶応義塾大学 SFC イベント『みえる水マルシェ』参加

2023年8月26日に慶応義塾大学の SFC が開催した富士吉田市の水の魅力を伝えるイベント『みえる水マルシェ』にゼミ生5人で参加し、受付やブース案内などの運営に携わった。みえる水マルシェは“富士吉田市の水の魅力をもっと多くの人に知ってもらいたい”そんな思いから慶応義塾大学 SFC の学生さんが開催したイベントである。

イベント当日は国指定重要無形民俗文化財日本三奇祭の一つである吉田の火祭り当日ということもあり県外からも多くの方が訪れており、たくさんの方から富士吉田に対する思いをお伺いすることができた。普段、他大学の学生と関わりを持つ機会がないため、同世代の学生から刺激を受ける非常に実りある時間となった。ここで生まれた繋がりを活かし、富士吉田で活動を行う学生同士の交流を広げることができた。



図2. 受付の様子

Uターンで選ばれるまちの魅力発見・発信

(3) 富士吉田市で活動する学生の交流を目的としたイベント『ふじよしだ大学開校式』の開催

2023年12月2日に、富士吉田市で活動を行う学生をターゲットに東京でイベントを開催した。(開催場所を東京に設定した理由は、学生の集まりやすさを考慮したためである。) ふじよしだ大学とは富士吉田市で活動する各団体が個々の活動を通して得た情報や人の繋がりを共有することを目的として発足したコミュニティのことである。当日は8つの大学と富士吉田市役所の方など、合わせて40名もの方に参加していただいた。

[参加していただいた団体一覧]

- ・慶應義塾大学
- ・東京大学
- ・山梨大学
- ・東京理科大学
- ・都留文科大学
- ・武蔵野大学
- ・富士吉田地域おこし協力隊
- ・かえる舎
- ・富士吉田市役所
- ・ふじよしだ定住センター

このイベントの目的は学生同士が繋がり、活動を理解し合うことである。そのため、当日は事前に作成した各大学の活動内容をまとめた資料を配布し、活動の理解を深めた。

[以下掲載内容]

- ・富士吉田市で活動を始めたきっかけ
- ・具体的な活動内容
- ・富士吉田市のどのようなところに魅力を感じているか



図3. イベントの運営に携わった学生



図4. 当日参加者集合写真

- ・富士吉田市で活動するメリットデメリット
- ・今後団体として富士吉田市とどのように関係を持ち続けたいと考えているか

また、活発な交流となるようにグループごとに分かれ、今後富士吉田市でどのような活動を行っていきたいかを考える企画コンペを行った。

イベント終了後にはオンライン上でアンケートを実施した。当アンケートの集計結果によると、イベント参加以前にはそもそも富士吉田市でこれほど多くの学

生が活動を行っていることを知らなかったという学生が多く、今回のイベントが互いの存在やプロジェクトの内容・目的を理解するきっかけとなったという意見が多くみられた。また、他大学との活動との共通点をもとに今後協力して活動を行いたいという意見も見受けられた。「どのような要素があれば今後も富士吉田での交流イベントに行きたいと思えますか?」という質問には「ゲーム・焚火・グルメ巡り」という回答が見られ、楽しみながら参加できる要素をイベントに取り入れることが人を惹きつける要素になると考えられる。



図5. 事前作成した資料



図6. 富士吉田市での活動内容を発表する様子



図7. グループワークを行う様子

Uターンで選ばれるまちの魅力発見・発信



図8. インスタグラムでの情報発信



図9. ゼミ WEB での情報発信

(4) SNSでの情報発信

インスタグラムとゼミのウェブサイトを作成・活用し、私たちのプロジェクトにおける活動背景や富士吉田市での活動の様子、富士吉田市のおすすめスポット

などの情報を発信した。これにより、富士吉田に関わりのある大学生同士の繋がりを構築し、自分たちの活動を記録発信することができた。また、外部の方に自分たちの活動を紹介する際にも活用を行った。

7. 成果と課題

(1) 成果

今回のプロジェクトを通して富士吉田市で活動を行う同世代の学生たちと直接関わる機会を持つことができた。それを通し、各大学がお互いの活動を認知することができた点が非常に大きな成果であると感じている。また、ふじよしだ大学を創設したことにより、活動中だけでなく活動後も続いていく持続可能な学生コミュニティの設立を実現させた。かかわりを継続させるうえで軸となるこのようなコミュニティをつくれたことは今後大きな役割を果たすと感じる。加えて SNS での繋がりも増やすことでだれでも気軽に富士吉田での活動を目にする機会を提供することができた。

また、私たち自身一からプロジェクトをスタートさせた経験がなかったためこの活動を通して外部の方との連絡の取り方や、先を見据えたスケジュール管理など今後の活動で必要になってくる基礎を学ぶことができた点も成果の一つであると感じている。これから先活動を行うにあたって大きな財産になると考える。

(2) 課題と今後の展望

課題の一つ目としてイベント終了後に行ったアンケートの回答率が100%にならなかったことがあげられる。当初はイベント中にアンケート回答の時間を設ける予定だったが、グループワークの時間が長引いたことが原因でアンケート時間を十分に確保することができず、回答率が100%にならなかった。アンケートはイベント終了から時間がたてばたつほど回答率が低下してしまうため、今後は参加者のリアルな声を聞くためにも、アンケート回答時間をイベント中にしっかりと設けたいと感じた。

今回の活動を通して、学生間の繋がりを構築することに成功したため、学生同士の活動の認知度は向上した。しかしながら、地域の方への周知がおろそかであった点がもう一つの課題点としてあげられる。そのため、今後は地域の人に向けて、学生たちが富士吉田市を拠点にこれほど多くの活動を行っているという情報を発信することで「学生×学生」だけでなく「地域×学生」のつながりをより一層強化していきたい。そうすることにより、富士吉田市における学生のプロジェクトに地域の方の視点や力が加わり、活動の幅や範囲が拡大していき、今以上に富士吉田市の魅力が広がると感じている。私たちが中心に情報を発信していくことで今後は地域の方と学生の架け橋になりたいと考えている。

学生は SNS から多くの情報を得るため今回の活動では SNS での情報発信を積極的に取り入れたが、地域の方にはまた別のアプローチが必要であると感じている。今後はターゲットに合わせた情報発信の手段についても考えることでより効果的な情報伝達を行いたいと考えている。

今回の活動を通して、学生間の繋がりを構築することに成功したため、学生同士の活動の認知度は向上した。しかしながら、地域の方への周知がおろそかであった点がもう一つの課題点としてあげられる。そのため、今後は地域の人に向けて、学生たちが富士吉田市を拠点にこれほど多くの活動を行っているという情報を発信することで「学生×学生」だけでなく「地域×学生」のつながりをより一層強化していきたい。そうすることにより、富士吉田市における学生のプロジェクトに地域の方の視点や力が加わり、活動の幅や範囲が拡大していき、今以上に富士吉田市の魅力が広がると感じている。私たちが中心に情報を発信していくことで今後は地域の方と学生の架け橋になりたいと考えている。

えている。また、今回のプロジェクトによって生まれた学生間のつながりやコミュニティを絶やすことなく、今後富士吉田市で活動を行う学生など、さらに多くの人そして次の世代へ広げることが重要であると感じている。【富士吉田市におけるUターン者=関わりを継続させる人】を増加させるという当初の目標を意識しながら今後も富士吉田で活動を行っていきたいと考えている。



図10. ふじよしだ大学での今後の活動のアイデア出しの様子

「らくくん文庫」

山梨英和大学附属図書館学生協働サークルLIKE “らくくん文庫” 実行委員会
唐澤 瞳・沼田 貴義・堀内 凜・佐藤 真衣・渡邊 安見・長田 都朋 (山梨英和大学)

1. 概要

山梨英和大学附属図書館学生協働サークルLIKE (以下、LIKE) は、読書推進活動を行うサークルであり、2020年度より、やまなし読書活動促進事業 (以下、やま読) のサポーターとして活動している。

「令和4年度学生イニシアティブ事業」に採択された「本と出会うマルシェ in 銀座通り商店街」(以下、本と出会うマルシェ) では、春光堂書店と連携した活動を行い、地域での読書推進活動に取り組んだ。今年度は前年度の反省を活かし、地域住民に図書館・書店を繋げられるようなみんなの文庫としての意味で「らくくん文庫」を企画した。「らくくん」とは、LIKEのマスコットキャラクターの名前である。

今年度は継続的な活動を行うために「こうふのまちの一箱古本市」(以下、一箱古本市) に出店するだけでなく、毎月第3日曜日に開催されている「甲府天空市ソライチ」(以下、ソライチ) へ出店した。

2. 問題の所在

本学の司書課程の講義にて、「公共図書館の利用者数は住民の約1割程度」と話題にあがった。2023年3月、LIKEの活動の一環で東京都武蔵野市にある「武蔵野プレイス」という図書館を見学した。この図書館は全国的にも有名で、見学した際にはさまざまな世代の方が図書館を活用しており、山梨県でも「滞在型図書館を体験してほしい」と考えた。

山梨県は人口100万人あたりの図書館数が1位であり、また先進的な活動を行っている図書館に対して送られる「Library of the Year2018」最優秀賞&オーディエンス賞を甲州市立勝沼図書館が受賞している。

このような先進的な活動を行っている図書館があるにもかかわらず、利用者数が1位ではない現状を知り、「もっと図書館を利用してほしい」という思いから「きっかけ作り」が必要なのではないかと考えた。そこで昨年度実施した「本と出会うマルシェ」を発展させ、地域住民と図書館と書店とを繋げられる「らくくん文

庫」を企画した。昨年度の企画の反省会では、「PRが足りなかった」「スムーズに運営することができなかった」「若者、特に中高生の参加率が低かった」以上の3つが反省点として挙げられた。

昨年はイベント告知を、やま読関係者や県内の図書館、職場体験で本学の附属図書館に来館した高校生を対象に行ったが、積極的な広報活動を行うことができなかった。そのため、企画自体の認知度が低かった可能性が考えられる。これを踏まえて今年度はさまざまな媒体を用いて広報活動にあたることにした。

スムーズな運営を行うことができなかった原因には、企画数の多さが挙げられる。昨年は6つの企画を同時に実施していたため、当日は慌ただしくなり、担当間の引継ぎが上手くできなかった。このことから今年度はイベント数を絞り、各企画に携わる人を増やすことで、企画の質を向上させることを目指した。

3. 目的

1) 図書館の利用推進

図書館を広く認知してもらい、利用者を増やす。

2) 読書推進活動

地域の方々に本と出会う場を提供し、読書のきっかけを作る。

3) 地域の書店の活性化

地域で活躍している書店をPRし、集客につなげる。

4) 図書館や書店を起点とした地域振興

図書館や書店を中心に、地域の魅力を発信する。

4. 方法

昨年度の一箱古本市にて出店した「本と出会うマルシェ」を主軸に、1年間を通じた継続的な企画を行う。昨年度の企画から、特に人気だったブックカバー作りを再考し、より親しみやすい企画にすることはもちろん、特に反省として挙げられた広報不足にも力を入れる。

一箱古本市のみの出店だけではなく、中高生や周辺の利用者の広報を目的として、甲府駅北口の空中回廊

で毎月第3日曜日に開催されているソライチにも出店する。空中回廊は山梨県立図書館へ繋がっているため、「図書館・書店の利用推進」も目的として強く意識している。

また、SNSを活用した広報として、X (旧 Twitter) を活用する。投稿が特に拡散されやすい時間帯にポストするだけでなく、やま読に協力をお願いし、リポストや「いいね」など、投稿の拡散を行なってもらう。

5. 活動内容

・実施企画について

「らくくん文庫」では年間を通しての単独ではなく継続的なイベントの開催を目指し、その第一段階として、8月20日(日)のソライチへ出店した。昨年度実施した「本と出会うマルシェ」では、チラシの配布とうは行なったが、直接的なアピールをすることができず、LIKEの出店スペースに一箱古本市の来場者がそのまま流れてくる、というケースが非常に多かった。そのためソライチに出店することや、直接来場者と話すことにより、企画についてアピールすることができる考えた。また、メインイベントである一箱古本市へ新しい層を取り込むことができるとも考えた。

ソライチは甲府駅北口から繋がる空中回廊が会場であるため、駅の利用者、そして中高生を中心とした若者をターゲットとした。また本プロジェクトの目的の一つである「図書館の利用促進」を達成するため、空中回廊から続く山梨県立図書館の利用促進を目指した。そのため、出店に伴い実施する企画は駅や図書館の利用者に向けたものを考案した。企画は「読書グッズの



図1. ソライチの様子



図2. 一箱古本市の様子

販売」「古本販売」「選書サービス」の3つである。図1はソライチに参加した当日の写真である。

本プロジェクトのメインイベントと設定した一箱古本市は、9月17日(日)に開催された。ソライチの出店の経験を活かし、同企画を更にブラッシュアップした。そして昨年度人気であった企画と合わせて、全4つの企画を実施した。企画は、「Book Choice」「オリジナルブックカバーづくり」「古本販売」「読書グッズの販売」である。図2は一箱古本市に参加した当日の写真である。

①読書グッズの販売

図書館の利用推進や読書推進など、LIKEではより多くの方が本と親しむことができるよう活動してきた。しかし、本に興味の薄い人に対してのアプローチについて、課題があった。この課題を基に、本に興味の薄い人でも読書をするきっかけづくりを提示できるようなオリジナルグッズとして、しおりとブックカバーを考案した。

グッズには、LIKEのマスコットキャラクターであるらくくんのイラストを使用することによって、多くの人に手に取ってもらえやすい工夫をした。しおりは、図3のとおり、色はチラシでも使用した水色、リボンは夏らしい黄色と本学のスクールカラーである臙脂色を取り入れた。

ブックカバーは図4のとおり、使用しやすいよう紙製を採用し、本のサイズに合わせて折ることができるガイドラインや遊び心としてらくくんの説明文を記載した。

また、オリジナルグッズとは別に、やま読のサポーターである日本出版販売株式会社 (以下、日販) に協力いただき、「文学の雑貨」のトートバッグを委託販売した。

トートバッグは通常、書店のみで取り扱われる製品

「らくくん文庫」



図3. しおり



図6. 古本販売



図9. 当日使用したブックカバー



図10. 配布したチラシ (表裏)



図4. ブックカバー

図5. トートバッグ



図7. 一言選書サービス

である。今回は、本学とも縁深い村岡花子が翻訳したことのある「赤毛のアン」など有名な文学作品をモチーフとした全6種類を販売した。図5は販売を行ったトートバッグの写真である。

②古本販売

L I K Eメンバーが集めたおすすめの本を販売する企画である。ソライチでは小説をメインに計46冊、一箱古本市では絵本やマンガなどさまざまなジャンルを取り入れた計125冊を用意し、販売を行った。

図6のとおり、カルトナージュを施した箱や、トランク、かごなども使用し展示方法・レイアウトを工夫することで、来場者が企画に興味を持つようにした。

③選書サービス

「図書館の利用促進」を達成するために考案した企画で、ソライチにて実施した。L I K Eメンバーから募集したおすすめの本を、図7のとおりカードに記載し、配布する内容である。

カードの表面には対象となる本をイメージしたキーワード、裏面には本の内容の詳細を記載した。表面を見ただけでは本のタイトルがわからないようにし、参加者が表面に記載した言葉から、どんな本なのか想像して楽しんでもらえるように工夫した。

④ Book Choice

一箱古本市にて実施した、参加者と会話し、事前に選定した本から好みに合わせた本をおすすめする企画



図8. 配布した紹介カード

で、参加者には、図8のとおり「紹介カード」を渡した。

「紹介カード」には本の魅力を伝える推薦文を添え、また参加後に書店で本を探しやすいようISBNを記載した。本企画は昨年度から引き続き、実施し、参加者の反応をみながら、その人の希望に合った本を紹介した。

本は「ビジネス」「ファンタジー」「マンガ・絵本」「推理・ミステリー」「日常・エッセイ」「美術・音楽」「恋愛・青春」の7つのジャンルに区分し、計30冊を選書した。1番人気だったジャンルは「美術・音楽」であった。

⑤オリジナルブックカバーづくり

昨年度に引き続き実施した本企画は、らくくんの塗り絵やシールの貼付などを行うことで、自分だけのブックカバーを作ることができる企画である。未就学児や小学生から人気を集めたことから、より子どもが楽しく体験できるよう、工夫した。昨年度は無地のクラフト用紙を使用したところを、反省点を活かし、図9のとおり、今年度は大きく改良した。よりスムーズに運営できるよう、あらかじめ塗り絵の枠を印刷し、シールは1人3枚までとした。サイズはA3とし、一箱古本市で購入したさまざまな本に使用できるよう、ガイドラインを入れ工夫した。塗り絵に使うペンも、子どもがもし汚したとしても問題ないように、洗濯で落とせるペンを採用し、ハンコについては色が混ざってしまうようウェットティッシュをあらかじめ用意し、使用した際にはその都度拭くよう徹底した。

そして体験スペースも昨年度よりも増やし、同伴する保護者が座る椅子も用意することで、安心して子どもと参加できるようにした。

・広報について

①チラシの配布

「らくくん文庫」の活動についてより多くの人に知ってもらうため、図10のとおり、チラシの作成を行った。昨年度の反省から、若者からも支持を受けるようなチラシ作りを目指し、ナチュラルな色合いを採用した。

表面には企画名を大きく記載し、インパクトのあるらくくんのイラストを使用した。またデザインは本の表紙をイメージしたものである。裏面にはイベントの日時や企画の紹介などの詳細を記載した。

このチラシは図書館や書店をはじめ、本学のオープンキャンパス、近隣の郵便局・銀行などで配布、設置を依頼した。その他にも、学内15の講義で周知した。

②メディア出演

より積極的に広報活動を行うために、ラジオや新聞に出演・取材していただいた。まず、図11のとおりFM FUJI「みらいterminal」に出演した。このラジオは山梨県内で活躍する若者を紹介するもので、9月1日(金)にオンエアされL I K Eの紹介やイベントの告知をした。



図11. ラジオ収録の様子

次に、山梨日日新聞に取材いただき、9月7日(木)の朝刊にイベントの告知を掲載いただいた。

③SNSの活用

本年度は、SNSでの広報活動に力を入れた。L I K EのXのアカウントを使用し、当日の企画や日時の詳細などを毎日かかさず投稿すると共に、各投稿には「#らくくん文庫」とタグ付けを行った。特にXでは15時から17時にポストされた投稿が見られやすいという点から、時間帯を考慮し投稿を行った。結果としては、時間帯を意識せずにポストした普段の投稿では500回程度しか見られなかったが、時間帯を選んでポストした投稿は700回以上見ることができた。また、一箱古本市の集客のため、投稿が伸びるよう工夫を施した。ソライチについての投稿では、「文章のみの投稿」「写真を一枚添付した投稿」「写真を複数枚添付した投稿」など、どんな投稿が伸びやすいのか実験的に行った。その中でもらくくんのアカウントでは「写

「らくん文庫」

真を複数枚添付した投稿」が最も伸びやすかったため、一箱古本市に関する投稿ではその点を考慮して投稿するなど工夫した。

これらの点を意識することによって、投稿は以前よりもリポストやいいねの数を伸ばすことができたが、そして更に投稿を見てもらうために、やま読に協力していただいた。具体的な内容としては、投稿にリポストやいいね、返信をしていただいた。これらのことを実施することにより、一箱古本市に関する投稿はソライチに関する投稿よりも多くの人に見てもらうことができた。また、投稿に返信をいただいたことが最も効果的であった。

6. 成果と課題

(1) 成果

ソライチでの売上は7,400円、一箱古本市の売上は19,350円であった。そのうち、価格の設定や冊数の多さから古本の割合が高いという結果となった。また、トートバッグは発注していた100枚を完売させることができた。読書グッズや古本を購入された客層の割合は40代、50代が最も多かったが、中高生や大学生の購入数も同じくらい高く、幅広い年齢層に支持を受けるものであった。SNSの投稿を見て来店した人もいたことから、SNSでの宣伝活動が販売に大きく影響を及ぼしたと考えられる。

Book Choiceでは、企画の参加者が紹介した本を図書館で借りたり、書店で購入したりしたなど、その後の読書推進に役立てることができた。当日はメンバーがそれぞれ好きなジャンルを記載した名札をつけ、コミュニケーションのきっかけを作ることができた。

オリジナルブックカバーづくりでは、昨年度も大人気の企画であったが、今回も未就学児と小学生からの反響が大きかった。昨年度の反省点から体験スペースを拡大したが、常にスペースが埋まってしまうほど好評だった。子どもたちがシールやハンコを使用して制作することで、自分だけのブックカバーづくりを提供することができた。また、本企画は他大学からも高い評価をいただいた。

古本販売で1番売れたジャンルは児童書や絵本だった。実際に、本企画に参加した子どもがブックカバー

づくりを体験している間に絵本を購入したり、企画参加前に子どもと一緒に絵本を選んだりする保護者の姿が見られた。このことから企画から企画へと参加者を増やすことができた。図12は一箱古本市当日の写真である。



図12. 一箱古本市の様子

今年度力を入れた広報活動は大きくイベントに影響した。実際に、ソライチでチラシを配布したことにより、そこからチラシを見て一箱古本市に来場された参加者がいた。オープンキャンパスでの設置でも、学生スタッフがチラシを見たことから、高校生の兄妹を連れて一箱古本市に来場されるなどの成果があった。このことから、ソライチでの出店やチラシの配布の手応えを感じた。SNSではやま読からの協力もあり、一箱古本市の投稿はソライチの2倍以上見られるようになった。そしてトートバッグの投稿から本学の学生が実際にイベントに足を運び、トートバッグを購入されることがあった。これらのことから、SNSの広報活動がターゲットである若者の集客に貢献したと考えられる。

一箱古本市当日は、近隣の飲食店からガス漏れが発生したことにより、一時は出店スペースが立ち入り禁止となった。そのため、2度の出店場所の移動を余儀なくされたが、その際には図書館や書店の関係者、周囲の人々に協力していただいた。トートバッグが完売したことや、ブックカバーづくりが常に人気であったことから、この一連の出来事は企画に影響することはなかった。また、一箱古本市当日の様子は山梨日日新聞にて、9月19日に記事が掲載された。

一箱古本市ではアンケートを実施した。設問は「普段、図書館や書店を利用しますか?」「らくん」のSNSを知っていますか?」の2つとし、全体では80件の回答となった。

表1. 図書館利用についてのアンケート

Q: 普段図書館を利用しますか?

どちらもよく利用する	21
図書館をよく利用する	3
書店をよく利用する	14
どちらも利用しない	4
合計	42

表2. 本企画についてのアンケート

Q: 「らくん」のSNSを知っていますか?

フォローしている・見たことがある	19
今日知った	19
合計	38

表1から読み取れるように、回答者のほとんどが図書館や書店を利用していることがわかった。また表2からはSNSをフォローし、継続的に投稿を見てくれる人がいることが読み取れる。そして一箱古本市でLIKEについて認知した人に対して、LIKEの活動をアピールする良い機会であったと考えられる。

(2) 課題

4つの目的について振り返りを行った。

1つ目の「図書館の利用促進」では、選書サービスにて山梨県立図書館の蔵書を選書したことから、「らくん文庫」の参加者が図書館を利用するきっかけを作ることができた。しかし、きっかけ作りを提供することができた一方、実際に図書館を利用した人数を明確にすることができなかった。今後は図書館の利用を直接促すことができる企画を検討する必要がある。

2つ目の「読書推進活動」については、新聞、ラジオなどで広報活動をしたことや、出店した2つのイベントを通して、読書のきっかけをより多く作ることができた。

3つ目の「地域書店の活発化」については、書店が主催のイベントに参加することで本プロジェクトと書店、双方のPRをすることができた。

4つ目の「図書館や書店を起点とした地域振興」について、県内の図書館・書店の協力によって、読書活動の推進に取り組むことができた。これらの点から、読書や図書館と書店を利用するきっかけを作ることができたが、これらを今後の活動に生かしていくことが課題である。

具体的な課題については2点挙げられる。1つは、流動的な運営が難しかったことが挙げられる。イベント当日に向け長い間準備を重ねてきたが、想定してい

た通りに運営することができなかった。たとえば、一箱古本市ではレジの配置場所から、金銭のやり取りに手間取ってしまい、直接参加者から改善したほうが良いのではないかと声をいただいた。また、当日のアクシデントから、連携が乱れてしまい、学生同士でカバーし合うことが困難であった。もう1つは若者、特に中高生への広報である。特に今年度はSNSでの投稿に力を入れ、時間帯の考慮や投稿形態など工夫を施してきた。しかし、実際には若者をメインの客層にすることは達成できなかった。SNSは5時から7時に投稿することも伸びやすいため、その時間帯にも投稿したり、前日の投稿をリポストしたりするなど、SNSでの広報活動が若者の目に止まる機会を更に作っていく必要がある。また、県内の読書活動促進事業や生涯学習講座に携わる関係者から、「行政の講座やイベントに申し込まれる形態は、圧倒的に紙媒体であるFAXやカウンター窓口などが多い」と聞く機会があった。SNSは何かを広報したり、アクションしたりする時に欠かせない存在ではある。しかし直接的なやり取りも重要であることを改めて実感した。今回の活動であれば、チラシの配布や直接の動きがけが挙げられる。

(3) 展望

今後の展望として中高生との協働活動を考えている。課題でもあった中高生を活動へ取り込んでいくことについて、たとえば中高生の図書委員会と連携した取り組みが挙げられる。実際にLIKEの活動で、中学校や高校の図書館を使った謎解きゲーム、読書会などを行っているため、さらに関わりを増やしていきたい。また図書館・書店を起点とした地域振興として、地域書店との連携展示を行うことができると考える。実例として未来屋書店と勝沼図書館が連携展示を行っていたことが挙げられる。これに続く企画を来年度に実施することを計画している。

連携展示に限らず図書館との共同活動としては、実例として県立図書館内のイベントスペースを使った活動がある。昨年と今年で人気だったブックカバー作りのワークショップを行うのが効果的ではないかと考える。

来年度は更に地域振興に繋がる活動を行うことを目指していきたい。

山梨市シャインマスカット ロゲイニング

山田 倫太郎・川口 萌百花・清水 裕介・田口 陽菜（山梨学院大学）

1. 概要

当プロジェクトは、山梨学院大学経営学部の今井ゼミに所属する学生と山梨市笛吹川フルーツ公園の指定管理者の一つである株式会社アグベルとともに山梨市の地域活性化を行うための活動である。

昨年度も学生イニシアティブ事業に参加し、「甲府の魅力をギュッとMAP」という活動を通して甲府市全域の地域活性化に貢献したいと甲府市内の飲食店をマップにまとめる活動を行ってきた。今年度は企業と協賛し、山梨市笛吹川フルーツ公園でイベントを開催する事にした。

2. 問題の所在

(1) 指定管理が変わったことでイベントが行えていない
今年度から、笛吹川フルーツ公園の指定管理が株式会社アグベルに変わりイベントが行えていなかった。

(2) 賑わいが少ない
イベントが行えていない事で、賑わいが少なかった。

(3) 県内の人あまり訪れない
県外からの観光客は多いものの、山梨県内の人々の来客は少ない。

3. 目的

株式会社アグベルとともに山梨市笛吹川フルーツ公園の活性化を目的とし、フルーツ公園に賑わいを魅せるためのイベントを企画した。このイベントは身体を動かすことで健康意識の向上を図るとともにコミュニケーションの場を提供し、県内外問わず参加してもらおう。

4. ルール説明

主催者から配られる地図を元に、時間内にチェック

ポイントを回り、得点を競うスポーツ。指定される各チェックポイントは難易度などによって得点が異なり、見本と同じ写真を撮影する。チェックポイントに設定された数字がそのまま得点となり、より合計点の高いチームが上位となる。回るルートは自由、体力だけでなくチームごとの戦略が試される。

このイベントのメリットとして、

- ・適度な運動になる
 - ・参加地域の魅力を発見
 - ・写真を撮ることで思い出に残る
 - ・チーム戦の場合はコミュニケーションをとることで絆ができる
- という点が挙げられる。

5. 活動内容（事前準備）

(1) 会場視察
実際にフルーツ公園に足を運び、駐車場の位置や施設を確認し、受付場所を決定した。また、テントや机など当日必要になる備品をまとめた。

(2) チラシ作り・印刷・設置
イベントを行うにあたり、周知のためのチラシを作る事にした。チラシは大学生同士で複数の案を出し、図1に決定した。印刷したチラシ及びポスターは小瀬スポーツ公園や山梨県立図書館などに設置させていた。

(3) 広告掲載
チラシ発行からイベント開催まで期間が少なく、さらにチラシは山梨県内にしか置くことができず、県外への周知には不十分だったため、Instagramで広告を出すことにした。最新のFacebook社の発表によると、Instagramの国内月間アクティビティアカウント数は3,300万人を突破しており、さらに国内アカウント数の43%が男性・57%が女性と男女問わず利用されていることがわかる。また、年代別で見ても幅広い年齢層からも利用されているSNSである。

リーチしたアカウント数は26,970件、そのうち、

Webサイトへアクセスされた回数は1,307回。リーチしたアカウントの性別・年齢層・トップの地域の割合は図2～4のとおりである。

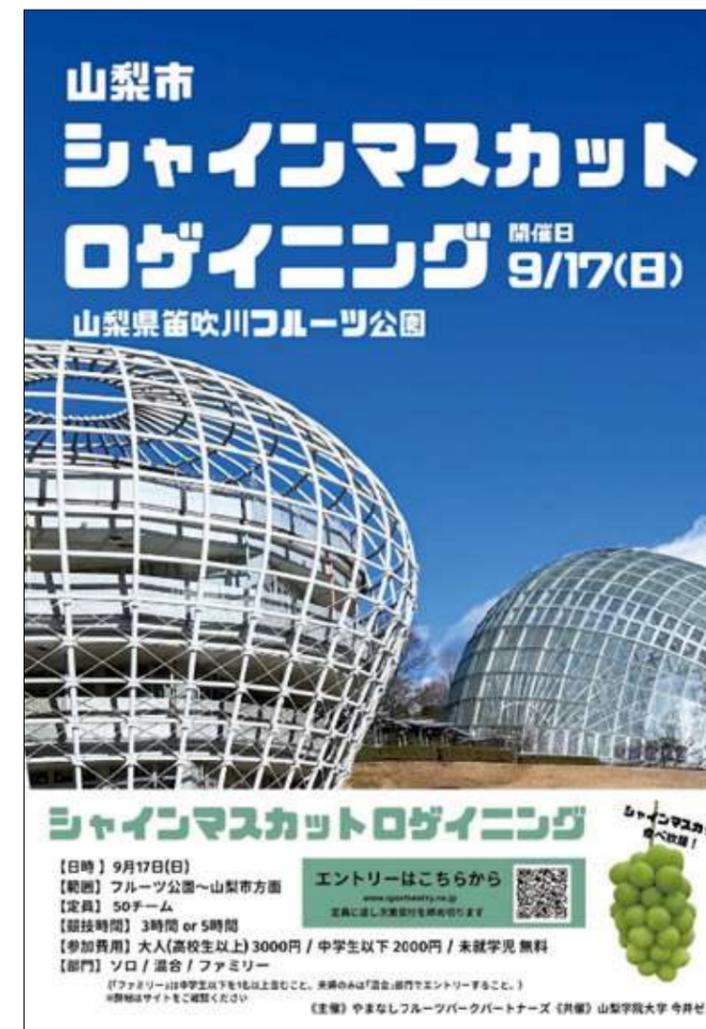


図1. チラシ決定案

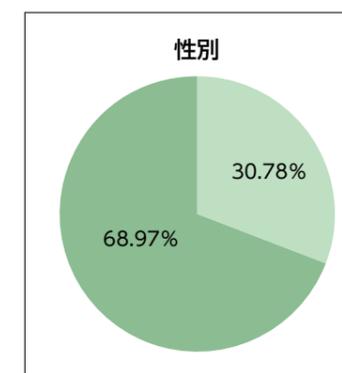


図2. 性別の割合

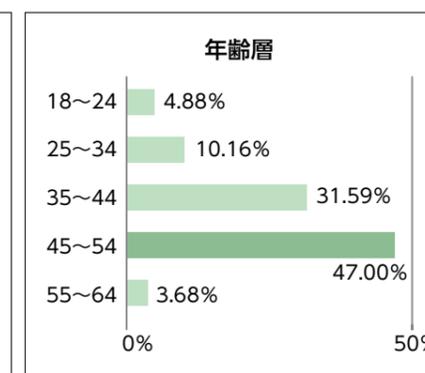


図3. 年齢層の割合

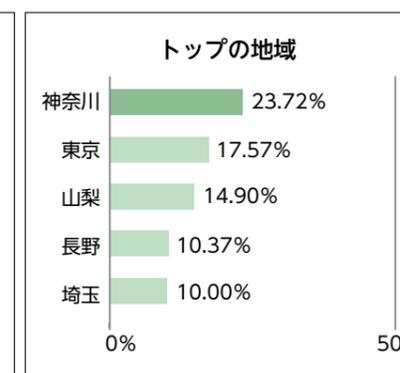


図4. トップの地域の割合

山梨市シャインマスカットロゲイニング



図5. 新聞記事

(4) 取材及びラジオ出演

①取材

山梨日日新聞の方に取材を受けた。イベント名決定の経緯や意気込みなどをお話したほか、イベントのルールや詳細を簡潔に記事にいただいた。(図5)

②ラジオ

FM富士のラジオに出演し、「イベント開催経緯」「学生とやまなしフルーツパークの共催について」「イベント内容」「参加方法」などを話し、イベントの周知を図った。

(5) 参加者アンケート作成

イベントに参加された方を対象にGoogleフォームでアンケートを作成した。参加した部門、イベントを知ったきっかけ、参加の決め手、満足度、スタッフの対応・態度、感想、改善点や要望などを聞くアンケート。

(6) 記録証・表彰状の作成

記録証は参加者全員に配布し、得点を記載することで形に残る。

表彰状は各部門一位に配布する。

インスタグラムの広告を閲覧している年齢層が高かったことから、記録証・表彰状ともにデザインをサンプルに仕上げた。(図6、図7)

また、全員に配布する記録証はあらかじめ名前を記載することで当日の負担を減らした。



図6. 記録証



図7. 表彰状

(7) 優勝賞品・参加賞・軽食の買い出し

①優勝賞品

各部門一位の方に優勝賞品を渡す。ソロ部門には県産のワイン、男性・女性・混合部門には生信玄餅、ファミリー部門には食べるぶどうジュースに決定した。

②参加賞

参加賞は、来ていただいた方全員にお渡しするものなので、山梨らしさを感じてほしいと考え、赤ワインの色と香りがお風呂いっばいに広がる入浴剤に決定した。

③軽食

軽食は競技終了後にシャインマスカットとともにお出しするようで、白桃と巨峰のシフォンケーキに決定した。

(8) 看板・横断幕・インスタボード作り

①看板

駐車場案内、受付案内、受付場所用の看板の作成

②横断幕

受付場所に設置するための横断幕

③インスタボード作り

参加者の方々に撮影用としてご利用いただくためのインスタボード

(9) 抽選用のくじの作成

やまなしフルーツ温泉ぶくぶくの無料ペアチケット10枚を提供していただいたため、受付で一人一枚くじを引いていただくことにした。優勝者の方にお渡しすることも考えたが、参加者全員にチャンスがある方がお子様にも楽しんでいただけたらと考え、くじという形を取った。くじのはずれは参加賞、当たりは参加賞とペアチケットのセットとした。

6. 活動内容 (当日)

(1) 設営

受付場所の設営、のぼり旗や横断幕の準備を行った。

(2) 受付

①3時間の部と5時間の部で区分

②チーム名及びお名前の確認

③マップ (図8) や注意事項などの資料を配布

④やまなしフルーツ温泉ぶくぶくの抽選を行う

➡当たりの方のみ名前を控える

⑤参加賞を選んでいただき渡す

(3) フィニッシュ準備

①成績表示場所の設営

②フィニッシュ時計の設置

③机にポイント一覧を貼り付け

④水・シャインマスカット・軽食の用意

⑤マスカットの房を切る

(4) [3時間の部] フィニッシュ

①チーム名及び名前の確認

②結果提出用紙 (チーム名入り) と水を渡す

③写真チェック及び得点記載➡記録証

④成績掲示➡表彰状記載

(5) [3時間の部] 表彰式

優勝賞品と表彰状を渡す

ソロ部門：県産白ワイン

男性・女性・混合部門：生信玄餅

ファミリー部門：食べるぶどうジュース

(6) [5時間の部] フィニッシュ

3時間の部と同様に、写真チェックや記録証の配布を行った。

(7) [5時間の部] 表彰式

3時間の部と同様に、優勝賞品と表彰状を渡した。

(8) 片付け

17:00に競技・表彰式を終了し、片付けを行った。



図8. マップ

山梨市シャインマスカットロゲイニング

アンケート結果

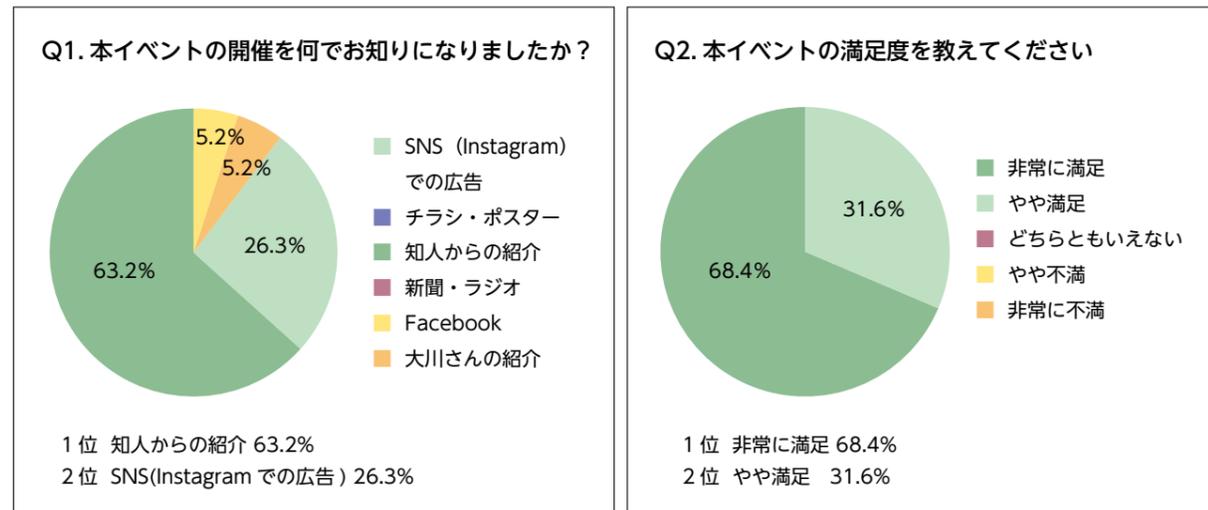


図9. イベントを何で知ったか

図10. イベントの満足度

(9) その他

- ・余った優勝賞品 (ワイン×1、信玄餅×1、ジュース×1)
- ➔ 当日お誕生日だった方：県産白ワイン
- 参加者の中で最年長だった方：食べるぶどうジュース
- 前日お誕生日だった飯島さん：生信玄餅
- ・写真撮影のお手伝い
- ・アンケートのお願い
- ・熱中症の対応

【参加者の感想】

- ・暑かった
- ・家族の思い出ができて、楽しかった
- ・ゲーム感覚で山梨市を観光できて楽しかった
- ・記録証も貰えて嬉しかった
- ・シャインマスカットを食べることができてよかった
- ・楽しく山梨市内を巡ることができ、地域の史跡にも触れる事も出来た。
- レース後のおもてなしも盛り沢山！
- ・景色が良かった
- ・地域の食べ物御スポーツの組み合わせ最高です！
- ・子連れでも楽しめたので良かった

7. まとめ

参加チームは27組で、人数にして57名の方にご参加頂いた。

参加された方の都道府県は表1の通りで、東京から8組、山梨からは6組で、一番遠いところだと大阪からお越し下さった方もいた。

参加部門はグラフの通りで、3時間の部はファミリー、5時間の部は混合の参加者が一番多かった。

参加費から得た売上は151,000円である。

評価できるポイントは

まずInstagramでの広告発信である。
Instagramで広告を出したことで、県内外問わずに周知させることができ、集客にも成功した。
また、短い期間での準備期間だったが、当日までのスケジュールを立てたことで計画的に最後までやりきることができ、当日もつつがなく運営できた。
アンケートを作成し、参加者からスタッフの臨機応変な対応が良かったなどの高い評価を受ける事ができた。
また、イベントを行う範囲を山梨市方面までにすることで山梨市の魅力を知ってもらおうという目的のもと、アンケートでも山梨市を観光できたなどの声を聞くこ

表1. 参加都道府県

都道府県	東京	山梨	神奈川	長野	愛知	群馬	静岡	大阪
組	8	6	5	2	2	2	1	1

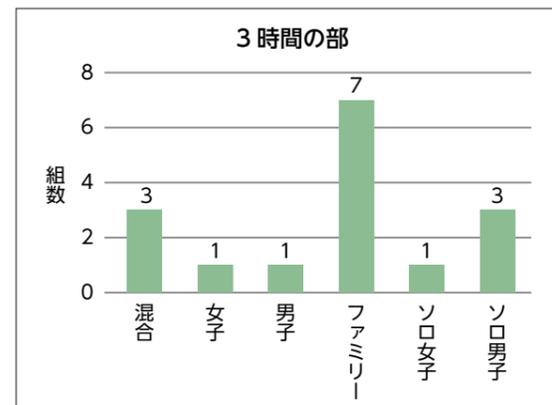


図11. 3時間の部参加組数

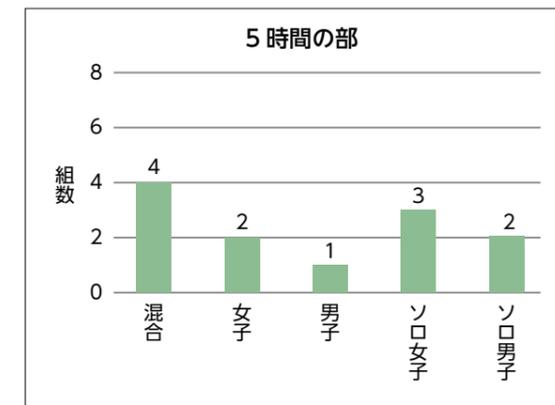


図12. 5時間の部参加組数

とができ、山梨市の魅力を発信するイベントとしてロゲイニングは適していると感じた。

また、このアンケート結果からフィードバックを行った。

補助金の活用においても、予算を17円オーバーしてしまいましたが、30,000円は最大限有効活用できた。

反省点としては

イベントのエントリーページの承認が遅れたことにより広告の掲載などにも影響が起きてしまった。

そのため、先方との早めの情報共有や事前確認、やるべきことの細分化が可能となるため、事前にタスクのリストアップを行う必要があると感じた。

また、熱中症やけが人などのリスクに対する認識が甘かったためリスクヘッジを考え直す必要性を感じた。

また、フォトログの可能性として今回は山梨市とフルーツ公園を掛け合わせ、イベントを行ったが、山梨市に限らず、県内の地域活性化、自治体の観光という分野において素晴らしいコンテンツであると実感できた。

徹底的な期日のマネジメント

【評価できるポイント】

- ・Instagramでの広告発信
- ・県内外問わず集客できた

- ・短期間で最後までやりきることができた
- ・入念な事前準備
- ・当日までのスケジュール管理
- ・アンケートの作成
- ・臨機応変な対応
- ・山梨市の魅力の発信
- ・補助金の活用

【反省点】

- ・エントリーページの承認に時間が掛かった
- ・チラシ、広告掲載からイベント当日までの期間が短かった
- ・広報力
- ・先方との連絡頻度
- ・先方との確認・情報共有不足
- ・リスクヘッジが不十分

【改善点】

- ・エントリーページの作成
- ・先方との許可取りでもっと入念に聞く
- ・タスクのリストアップ
- ・やるべき事の細分化
- ・熱中症対策を行う
- ・アンケートの項目

大月桃太郎プロジェクト

～夢と未来のページ～

進邦 和馬・佐藤 優奈・渡邊 康太・白鳥 霞 (山梨県立大学)、栗原 麻理実 (山梨英和大学)、堀川 咲希子 (都留文科大学)

1. 概要

大月桃太郎プロジェクトの主な目的は地域活性化を行い地域に関心を持ってもらうことである。そういった経緯で発足した大月ゼミは活動の場を大月に設定して他大学の学生を交えながら活動している。これまでも大月ゼミでは大月桃太郎伝説に関する活動を行ってきた。JR 東日本大月駅と連携した桃太郎伝説の史跡が残る場所を巡る「駅からハイキング」や桃太郎観光ガイド養成講座などを行ってきた。また、2021年には日本全国の桃太郎伝説が大月に集まる「大月桃太郎サミット」が開催された。このサミットで私たち大月ゼミはサミット公式ロゴマークの募集、審査を行った。このように大月に密着しながら大月の地域活性化を行っている。

表 1. 大月市の年齢階層別人口推移 (令和3年度大月市統計書)

年齢階層別	平成 22 年			平成 27 年			令和 2 年		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
総数	28,120	13,639	14,481	25,419	12,378	13,041	22,512	10,924	11,588
0～4才	680	328	352	579	285	294	409	186	223
5～9	953	498	455	677	327	350	576	280	296
10～14	1,252	668	584	954	498	456	672	335	337
15～19	1,679	798	881	1,331	680	651	1,050	509	541
20～24	1,385	697	688	1,102	561	541	861	473	388



図 1. 大月市の総人口の推移 (令和3年度大月市統計書)

2. 問題の所在

現在、大月市は人口減少が止まらなくなっている。令和3年度大月市統計書によると1950年代半ばから人口減少が始まり多少の差はあるものの1950年代から2010年代にかけて減少し続け、歯止めが効かない状況になっている。また、特に若者の人口減少が顕著になっている。平成22年から令和2年にかけて0歳～19歳の人口は4564人から2707人まで減少しており、これからの大月市を担っていく存在が減っていることがわかる。大月市は東京までの直通快速列車もある他、特急あずさ、かいじ号も停車するなど山梨県の中でも東京へのアクセスが良い地域である。また、大月市内には4年制大学がなく、進学や就職を機に大月を離れる若者も多い。しかし、これは日本全体の問

題でもあり解決するのは難しいと考えた。そこで若く、早い時期から地元へ愛着を持たせ、将来的なUターンが期待できるのではと考えた。その愛着を持つキッカケとして大月桃太郎伝説の有効活用を考えたい。しかしここにも課題がある。たとえば今まで大月桃太郎伝説を継承してきた大月桃太郎連絡会のメンバーが高齢化している。そのため今後の桃太郎伝説の持続的な継承が難しくなっている。また、そもそも桃太郎自体が岡山というイメージが強く身近に感じづらいことだ。このままではせっかく大月に残っている桃太郎伝説が衰退、最悪の場合なくなってしまう。

3. 目的

当プロジェクトの目的は2つある。

1つ目としては、大月桃太郎伝説の知名度を向上させることだ。大月駅に広がっている桃太郎のモニュメントや、「モモタローソン」という桃太郎のキャラクターが外壁パネルに大きく描かれたコンビニエンスストア、また鬼の住処と名称されている岩殿山や、犬目、猿橋、鳥沢などの大月桃太郎伝説を地域資源として活用されている様子が大月市内のあちこちで見られる。このような地域資源を若者に普及させることで大月桃太郎伝説の知的な好奇心を高め、大月桃太郎伝説を大月の魅力として感じてほしいという思いから、まずは知名度を向上させるべきだと考えた。



図 2. 日本3大奇橋の一つ「猿橋」

2つ目は幼少期の頃から地元を知るきっかけをつくることで、地域の愛着心を高めるためである。大月桃太郎伝説がどのくらい児童に浸透しているか実際に大月東小学校で調査したところ、大月桃太郎伝説について知っている児童は約2割程度の少数人数しか見られなかった。この現状から地元の若者に対して大月桃太郎伝説について知るきっかけとして、自分たちが中高生だけではなく児童にも手に取りやすい絵本を作成することで地元への愛着が深まり、大月桃太郎伝説を通して地元貢献に携わる学生も増えるのではないかと視野に入れ、このような企画を考えたい。

4. 方法

毎週水曜日に対面やオンラインなどでMTGを開催して、現状の課題や今後の方向性について話し合った。また郊外活動としては休日や長期休みを利用して大月に訪れることで、桃太郎ウォーキングという大月桃太郎に関連のある歴史的名所を大月短期大学の学生と共に巡ったり、大月東小学校で紙芝居の読みかきを行なうなどのコミュニティを広げて、地元の方と密接に交流関係を築いた。また、大月桃太郎を親しみやすく感じてもらうために学生視点ならではのオリジナル要素を含めた大月桃太郎伝説の絵本の作成に現在取り組んでいる。

5. 活動内容

(1) ローカルディスタンスとの交流

東京から大月に移住した人々たちによって結成された大月を中心に活動するコミュニティ団体であるローカルディスタンスと交流会を実施した。「大月を活性化したい」という同じ志を持った方々とお互いの今後の展望を共有したり、あらゆる視点から活動に対するアドバイスを頂いたりした。夏には、クラウドファンディングの返礼品の打ち合わせを行い、大黒屋という猿橋にあるカフェの料理の提供において、協力してくれることになった。しかし、クラウドファンディングの計画がしっかりと決まっていなかった中で、返礼品の話を進めてしまったことは、反省すべき点であった。

大月桃太郎プロジェクト

～夢と未来のページ～

(2) 「みらいサロン」への参加

製本にかかる費用をクラウドファンディングで集めようとしていたため、クラウドファンディングについてアドバイスを頂けるみらいサロンに参加した。まずは、閲覧者として参加し、クラウドファンディングの進め方を学んだ。2回目は発表者として参加し、参加者や運営者の方々から助言を頂いた。「大月桃太郎伝説の絵本をつくる意味は何か」や「最終的なゴールは何か」ということを再度考え直す機会となった。

(3) 「桃太郎ゴミ退治とエシカル交流」への参加

ローカルディスタンスが主催するイベントに参加し、地域の在り方や社会問題について考えるきっかけとなった。地域の方々や地方の活動に興味を持つ方々と交流する中で、高校生の時にクラウドファンディングで資金を集めて絵本作りをした都留文科大学の学生と出会い、大月桃太郎伝説の絵本作りに協力してくれることになった。また、桃太郎俳優や桃太郎研究者として有名な神木優さんにお会いし、桃太郎に関する理解を深めた。

(4) 「桃太郎ウォーキング」への参加

大月短期大学の授業の一環である桃太郎ウォーキングに参加し、大月短期大学の学生と一緒に桃太郎伝説に関する史跡を巡った。実際に自分たちの目で桃太郎の舞台を確認し、絵本作りの素材を集めながら歩いた。「大月に伝わる物語を残したい」という気持ちから猿橋で国定忠治の紙芝居の読み聞かせをしている方との出会いもあり、知識や人とのつながりの面において大きな進歩となった。



図 3. 桃太郎ゴミ退治の様子



図 4. 桃太郎ウォーキングの様子

(5) 桃太郎連絡会とのつながり

昔から今に伝わる桃太郎伝説に、地域性やオリジナル性を加えた。上野原市の特産品や大月市内で有名なアクティビティを取り入れたり、挑戦することやチームワークの大切さを感じられたりする内容を考えた。しかし、大月に残すものや子どもたちに地域を伝えるメディアとなるものを、私たちの考えだけで進めて良いのかという不安があった。そのため、桃太郎連絡会の方を何度か尋ね、物語の内容についてアドバイスを頂いたり、桃太郎連絡会の方々の思いを知ったりする機会を設けた。

(6) FM FUJI への出演

FM FUJI の「Advancing Yamanashi27」という番組に出演し、広報活動を行った。そもそも童謡として有名な桃太郎と桃太郎伝説の違いを知っている人が少ないため、桃太郎伝説が大月のものである根拠を紹介したり、大月を盛り上げるために私たちがしていることについて話をしたりして、周知を図った。

(7) 紙芝居の読み聞かせ

まずは絵本作りに必要な情報や意見を集めるために、以前都留高校の学生が作った大月桃太郎伝説の紙芝居を都留高校からお借りし、私たちが物語に工夫を加えた内容を反映させたものと組み合わせた紙芝居を用いて、猿橋にある大黒屋で紙芝居の読み聞かせをした。大黒屋を訪れた人に、大月桃太郎伝説の認知度を図ったり、元の物語に手を加えた部分について意見を頂いた。また、大月市役所と連携し、大月東小学校の学童「やえざくらⅠ・Ⅱ」で子どもたちに読み聞かせをした。子どもたちが喜ぶ姿を見て活動の励みになったと同時に、子どもたちの反応や感想から、子どもたちが理解しやすいような文章や物語の構成にする必要があると気づくことができた。



図 5. 桃太郎ウォーキングの様子



図 6. 大黒屋でのイベント告知 1

大月桃太郎プロジェクト

～夢と未来のページ～



図 7. 大黒屋での読み聞かせ 1



図 8. 大黒屋での読み聞かせ 2



図 9. 大黒屋でのイベント告知 2



図 10. やえざくらでの読み聞かせ

6. 成果

成果として挙げられるのが3点ある。1つ目は桃太郎連絡会をはじめ大月市内の方、桃太郎関連の団体との関係性を構築できたことだ。今年度の前期には昨年度以前の活動からの関係性がうまく引き継げておらず市内の方々とのコミュニケーションがうまく取れていなかった。この一年を通し絵本作りの相談などにも乗っていただけるような関係性を構築することができ、地域にとってより良い絵本を作れる第一歩となると考えている。2つ目は地元の子どもたちや観光客に対する認知度の向上と認知度の把握を図れたことだ。11月には猿橋に来る観光客を対象に行った読み聞かせを行った。他県の方々に聞いていただき伝承に対する認知がないことが分かった。

そして12月の市内の子どもたちへの読み聞かせのほうでは大月桃太郎伝説の存在自体は知っているも内容がどういったものかというところまでは把握しておらず、難しかったという意見が多くみられたことから工夫次第で子どもたちへのさらなる認知度向上が図れることがわかった。3つ目は地域への理解が深まり問題への解像度が深まったことだ。外野からの一方的な干渉で独りよがりな活動になるのではなく、地域の人たちと協働することでよりの確なアプローチを行っていけると考えられる。

7. 反省点

1つ目は主に前期において地域の方との交流や協働をおろそかにし、独りよがりの活動になってしまっていた。地域が抱える課題を外から見て知った気になっていたと考えられる。前期から値域の方とのコミュニケーションを大切に、もっと地域の方とともに活動していくべきであった。2つ目はスケジュール設定が不適切であった。1年間という期間にとらわれ自分たちのキャパシティにあったスケジュール設定にできなかったことだ。そのためスケジュールに追われ自分たちがしたかったことを見失い、地域とのつながりをおろそかにしてしまった。3つ目はクラウドファンディングにとらわれすぎた。これは前半絵本を多く作って

配ればよいと思い込んでいた。しかししっかりと地域の実情に合った方法を選択して、自分たちの状態に合わせて段階を踏んでいくべきであったと今にしては考えられる。

8. 今後の展望

現在行った紙芝居は都留高校が作成した紙芝居をお借りして自分たちなりにアレンジしたものを用いていたが今後の活動としては自分たちなりの紙芝居を作成しそれを用いて地域内で積極的に活動していく。それが受け入れられれば最終的な段階として絵本作りという当初の目的に立ち返ることができればよいというのが今後の展望である。



図 11. 桃太郎史跡の1つ「鬼の岩屋」

キャンプで深める地域の輪

つるっ子プロジェクト実行委員会

掛川 紗帆・白鳥 霞・名取 沙羅・森屋 紫苑・山中 えりか・山下 実咲希・佐野 歩夢・古屋 莉菜・佐藤 麗乃・馬場 麻絵（都留文科大学）

1. 概要

つるっ子プロジェクト実行委員会は都留文科大学の学生と都留市の地域住民によるボランティアで構成されている地域ボランティア団体である。月2回「つるギフト」と「つる食堂」という活動を行っており、「つるギフト」では学生と地域ボランティアの方々とでお弁当を作り、寄付でいただいた保存食品を詰め合わせたものをギフトとし、配達を行っている。「つる食堂」では学生と地域ボランティアの方々とでご飯を作り、来てくださる地域の方々にふるまっている。そこでは子どもたちが楽しく遊んでいる様子がいつも見られる。これらの活動の中で地域の子もたちとのつながりを作るため 2023 年 8 月 8 日に、つるっ子プロジェクト実行委員会の活動拠点であるお寺・耕雲院でデイキャンプを実施した。

2. 問題の所在

現在行っている月2回の活動では、多くの地域の方々の居場所になっているが、来てくれる子どもと運営する大学生の交流があまりないと大学生の多くが感じていた。具体的には、子どもたちは同世代の友達と遊んでいて、学生は見守るだけという現状の課題があった。子どもたちは大学生との距離感がわからなかったり一緒に遊びたいけど声をかけられないといった悩みを持っていた。

3. 目的

つるっ子として、子どもたちに何かしらの機会を提供したいという思いのなか、地域交流による拠点づくりの促進や子どもたちに自分を取り巻く環境から気づきを得てもらいたいという目的のもとデイキャンプを開催した。

4. 方法

活動の拠点であるお寺で地域の小中学生にチラシを配り参加を募った。当日は学生が中心となり地域探検・座禅体験・カレー作りの三本柱を軸にデイキャンプを実施した。

5. 活動内容

当日はこのような流れで行った（以下参照）

- 9 時半～ 集合
- 10 時～レクリエーション①（ラジオ体操第2まで、宝探しゲームで班分け:待ち時間は 名札づくり）
全体でルール（キャンプ説明）
- 11 時～ 探検開始
（東桂の地域を学生と子どもと一緒に散歩し各スポットに都留市にまつわるクイズを設置）
- 12 時～ お昼ご飯
（大学生が作ったお弁当をたべてもらう）
- 13 時～ すいか割り
（外でみんなでスイカ割り）
ビンゴゲーム
- 14 時～ 休憩時間（お昼寝や自由時間）
（寄付でいただいたパソコンで遊ぶ子どもたちや元気に駆け回る子どもたちがいた）
- 15 時～ 坐禅体験
（副住職が子どもたちに座禅を行う）
- 16 時～ カレー作り
（探索の班に分かれカレー作りをてつだってもらう）
- 18 時～ 夜ご飯
- 19 時～ 20 時 花火、マシュマロ
- 18 時～ 夜ご飯
- 19 時～ 20 時 花火、マシュマロ

上記のビンゴ景品やお昼ご飯の具材、花火やマシュマロにイニシアティブ予算を使用した。



図 1



図 2



図 3

図 1. ルール説明

小学生から中学生までの子どもたちが学生の話をしっかり聞いて、スムーズに進めることができた。

図 2. 探索の様子①

東桂を探索する途中、都留市に関するクイズを行った。大学生より小学生の方が都留市に長く住んでいる

ため、子どもたちが大学生に答えを教える場面や一緒に悩む姿が見えた。

図 3. 探索の様子②

探索の最後は東桂の観光スポットである太郎次郎の滝を訪れた。大きな滝からはマイナスイオンを感じ、暑い日であったが自然の涼しさを感じることができた。

キャンプで深める地域の輪



図 4



図 5



図 6



図 8



図 7



図 9



図 10



図 11

図 4. お昼ご飯の様子

お昼では大学生が作ったお弁当をみんなで食べた。食べ盛りの子もたちはお代わりなどもしていて、私たちが作ったご飯をおいしいとたべている姿はとてもうれしかった。

図 5. スイカ割り

スイカ割りを行いみんなが学年を超えて協力し合っていた。

図 6. ビンゴ大会の様子

学生イニシアティブ事業の補助金を使用したビンゴの景品を前に子どもたちはとてもワクワクしながらビンゴを行っていた。

図 7. 自由時間

寄付していただいたパソコンでゲームをする子どもたちやビンゴで当たったお菓子を食べる子どもたち、友達とおしゃべりをする子どもたちなどそれぞれが自由な時間を過ごしていた。

図 8. 座禅体験

副住職が子どもたちに座禅を行った。普段座禅を体験する機会がめったにないため大学生も子どもたちも貴重な体験で少し緊張した様子だった。

図 9. 夜ごはん

みんなで作ったカレーはとてもおいしく、子どもたちも自分が作ったカレーにとっても満足そうであった。

図 10. カレー作りの様子

各班に分かれてカレーの具材であるじゃがいもやニンジンの皮をむいてもらったが、カレーが楽しみで何回も「カレーできた?」と聞いてくる子どもたちがいて夜ごはんの期待が高まっている様子であった。

図 11. 花火の様子

屋外で花火を行い、みんなが楽しみながら花火をしたり、マシュマロを焼いたりしている場面がみられた。

キャンプで深める地域の輪

成果と課題（地域への提言など）

6. 成果

イベントを通じた成果は4つある。

まず1つ目に、大学生と子どもたちが、話したり、遊んだりすることができ、いつも以上に交流することができたことだ。一緒にキャンプに参加することで子どもたちから話しかけている場面があり、距離を縮める日になっていた。2つ目にデイキャンプで繋がった子どもたちが次のつる食堂に来た時に積極的に学生と話しかけてくれることが増え、学生側も、デイキャンプの話題をきっかけに子ども達と話す機会が増えたことだ。3つ目に学生と子どもの間だけではなく、子どもたちの中でも学年を越えたつながりができており、つる食堂時の遊び時間では別々の学年が混ざった遊びが多く見られるようになった。4つ目に参加した子どもたちに実施したデイキャンプのアンケートからは楽しかったという声が多くあり、自分たちが企画したもので喜んでくれたという喜びと達成感があったことである。

図 12. 子どもと大学生が遊ぶ様子

自由時間にみんなで遊ぶ様子。休憩中も体を



図 12

7. 課題や展望

表 1 デイキャンプに参加した子どもにとって アンケート結果

- ①今日のキャンプは楽しかったですか？
はい→A いいえ→B
- ②何が一番楽しかったですか？
- ③大学生の名前を何人覚えられましたか？
- ④今日の感想をおしえてね
- ⑤今日のようなイベントがあったらまた来たいですか？

表 1

①	②	③	④	⑤
A	キャンプ	6	遊んだ	A
A	花火	8	ビンゴで一などが取れなかったけど楽しかった	A
A	ビンゴ	2	一などが当たって嬉しい	A
A	花火	3	花火が楽しかった	A
A	花火	6	みんなと一緒にいてとても楽しかったです。一生の思い出になりました。	A
A	ビンゴ	4	最初の散歩？みたいなやつがクイズとかがでて面白かった。	A
A	全部	5	すべて楽しかった	A
A	花火	7	カレーづくり	A
A	ビンゴ	8	ビンゴ大会が楽しかった	A
A	ビンゴ	8	ビンゴ大会をした	A
A	花火	10	ビンゴが楽しいから	A
A	ビンゴ	6	ビンゴ大会が楽しかった	A
A	ビンゴ	5	滝に行ったりあまりやっていないことをしたので楽しかったです	A
A	ビンゴ	2	楽しかった	A
A	ビンゴ	3	クイズや運試し、スイカ割りを楽しんでスイカ割りで三分の二やれてうれしいです	A
A	ビンゴ	4	ビンゴが楽しかった	A
A	鬼ごっこ	2	楽しかった	A
A	ビンゴ	4	ビンゴで2 が当たった	A
A	焼きマッシュマロ	3	今日は体を動かして楽しかったです	A
A	花火	0	楽しかった	A
A	花火	2	キャンプがとても楽しかった	A
A	花火、カレーの手伝い	5	とても楽しかった	A
A	鬼ごっこ	3	とっても楽しく6年生とも仲を深めることができました	A
A	鬼ごっこ	2	知らない子と仲良くなれた	A

デイキャンプで子どもたちの笑顔を見て、子どもたちに安心できる居場所や、遊び場、世代間交流の場を作っていきたいと考えた。予想していたよりも子どもたちが進んで学生の手伝いをしてくれたことから、子

どもたちが自分で何かに取り組むという機会を増やしたいと考える。今回私たちが企画したデイキャンプに子どもたちが参加してくれるかどうか不安だったが、定員まで応募があり子どもたちみんなが参加してくれたことでとてもうれしかった。その後「つる食堂」でデイキャンプに参加した子どもから、「今年もやってほ



図 13



図 14



図 15



図 16

図 13. 学生手書きの看板

図 14. 子どもたちが進んで手伝う様子

各班に分かれてカレーの具材であるじゃがいもやニンジンの皮をむいてもらったが、小学6年生の子どもたちは自分から進んで切ったり、鍋をまぜたりしておりそれを見たほかの子たちも進んで運んでくれて、協力して物事を成功させる力がみんなにはあるのだと感じた。

図 15. 寄付でいただいた野菜をおひるごはんで使用

寄付でいただいたキュウリを夏らしく一本漬けのようにし夜ごはんと一緒に食べた。

図 16. 開催後の反省会

デイキャンプ後の反省会で様々な評価や課題が浮かび上がった。今回初めて大学二年生中心となりイベントを行ったためうまくいかないことも多かったがイベントが終わりホッとした様子であった。

地域サポーターと難民支援

～多様性を受け入れる地域づくり～

難民支援サークル Good Samaritans

粟澤 日菜・田野口 光・牧萌 香・長沼 疾風・山本 真里亜 (山梨英和大学)

1. 概要

Good Samaritans は、難民の故郷の料理を学生食堂のメニューに取り入れ、「食」を通じた難民支援「Meal for Refugees」などを行っている有志グループで 2018 年に発足した。山梨英和大学は、キリスト教の精神に基づく大学であり、Good Samaritans というグループ名は、聖書に出てくる「よきサマリア人」のたとえ話から取ったものである。このたとえ話に出てくる、傷付いて倒れた人を見過ごさず、手を差し伸べたサマリア人を模範とし、命を脅かされている難民に目を向けて、難民支援活動を行っている。これまで、地域の人と手を取り合い、難民支援の課題を共有するために、また難民問題を考えるきっかけになるよう参加型のイベントなどを企画し、開催してきた。そして 2022 年度は、サポーター制度という、Good Samaritans の難民支援活動を応援してくれる地域の人＝“サポーター”と支援の力を積み上げていくための仕組みを導入した。今年度 2023 年度もサポーター制度をさらに発展し継続させた。

2. 問題の所在

現在、私たちの社会は多様化している。たとえば、山梨県には 18,000 人を超える外国人が在住し、県内の外国人の数は 2015 年から増加を続けているため、国際化しているとも言える。

3. 目的

今年度もサポーター制度を継続することによって身近な隣の人を助け合い、多様性を受け入れる地域を育むことを目指したいと考えた。その理由は、難民支援に携わるサポーターの気づきが、多様性を受け入れる社会、まちづくりのために役に立つのではないかなと思ったからである。そのために、多くの人に難民問題への関心を持ってもらい、地域で困っている人への気づきに繋げる「難民支援」からの視点と、多様性を受け入

れて地域の全ての人と支え合い、共生できるまちづくりに貢献しようとする「地域づくり」の視点を融合させることにした。

4. 方法

サポーター制度とは、難民支援活動をしてくれる地域の人＝“サポーター”と支援の力を積み上げていくための仕組みである。

サポーターの人数について、昨年度 30 人であったところ、今年度のサポーター数は 50 人とし 20 人増やした。

Good Samaritans のメンバーで 80 人以上に声をかけ、依頼をした。今回のプロジェクトの経緯や 5 つのアクションの内容、この仕組みが難民の命を守る行動につながることを伝えて、サポーターを募った。このとき、幅広い年齢層、すなわち多様な価値観を持った人たちがサポーターを構成しようと考えていたため、友人などの近い関係性の人ばかりにならないよう、留意した。

そのようにして集まった、山梨に住む、10 代から 80 代の幅広い世代の 50 人に協力してもらった。

表 1. サポーターの年代

年代	人数
10代	2
20代	19
30代	3
40代	13
50代	6
60代	4
70代	2
80代	1
合計	50

サポーターと、Good Samaritans のメンバーが共に難民問題に向き合うために、Good Samaritans から「5 つのアクション」をサポーターに提示し、そのアクションに取り組んでもらった。

サポーターに提示したアクションは以下の通りである。

【サポーターに提示した 5 つのアクション】

- ①「難民問題についての動画を見よう」
- ②「寄付をお願いします」
- ③「ミャンマーの難民について知ろう」
- ④「サポーター登録料を納めてください（寄付金は任意）」
- ⑤「取り組みの振り返りシートに回答しよう」

5. 活動のスケジュール

活動のスケジュールは、以下の通りである。

【5月】

サポーター制度の継続決定

【7月】

サポーター募集開始

【8～9月】

Good Samaritans オリジナル動画（全 4 回）を配信

【10～12月上旬】

サポーターから手渡しで登録料、寄付する物資を受け取り、レトルト食品「チェッタアールヒン」とミャンマーの難民についての資料を配布

【12月下旬】

サポーターから集めた物資を難民支援協会に寄付「取り組みの振り返りシート」をサポーターに送信

【1月】

「取り組みの振り返りシートの分析」

【2月】

難民支援協会と国連 UNHCR に寄付金の送付

6. 活動内容

サポーターに取り組んでもらった 5 つのアクションにおける活動内容は次の通りである。

【①難民問題についての動画を見よう】

まず、「難民問題についての動画を見よう」というアクションについては、難民問題について知ってほしいことを Good Samaritans のメンバーでまとめ、オリジナル動画を全 4 回配信した。それに加え、YouTube の国連 UNHCR による「家を追われる」ということがどういうことなのか考えさせられる内容の動画を共有した。

Good Samaritans のオリジナル動画は、どのような内容にするか、メンバーで吟味し、試行錯誤して作成した。動画は、毎回 10 分程度のもので、パワーポイントを使用し写真やイラストなどを組み入れ、ナレーションをつけて録画をし、配信した。

各動画の内容については以下の通りである。

- ・<第 1 回「難民の出身国、受け入れ国（8 月 30 日配信）」>
難民の出身国、受け入れ国や世界の故郷を追われた人の数を説明した。難民も、私たちと同じように同じ世界で生活している人々であることを伝えた。
- ・<第 2 回「国を越える難民、難民キャンプでの支援（9 月 6 日配信）」>
難民キャンプが抱える問題や課題は大きく、支援が必要とされていること、難民は、私たちが目を背きたくなるような辛い経験をしてきた中で、自立に向け、そして未来に向けて行動していることを伝えた。
- ・<第 3 回「日本の難民問題（9 月 13 日配信）」>
日本の難民受け入れが少ない理由の一つとして、難民問題が日本社会で、十分に知られていないことがあげられる。そのため、偏見や目先の感情に振り回されず、難民ひとりひとりが持つ背景・経験が異なることを理解していくことが重要であるということを伝えた。
- ・<第 4 回「私たちにできること（9 月 25 日配信）」>
私たちが難民支援においてできることと、難民も私

地域サポーターと難民支援

～多様性を受け入れる地域づくり～

たちと同じように生活してきた人々であることを考えると、難民問題は、私たちがどれだけ多様な背景や価値観を持つ人々を受け入れられるのかという問題に繋がっているということを伝えた。

【②寄付をお願いします】

次に、「寄付をお願いします」というアクションについては、難民支援協会を通じて、日本に逃れてきた難民に日用品や食料品を寄付するために行った。サポーターに紅茶ティーパックやインスタントコーヒー、タオルや折りたたみ傘といった、難民支援協会が通年で必要としている物資を集めてもらった。

写真の通り段ボール3箱分を難民支援協会に送ることができた。

【③ミャンマーの難民について知ろう】

次に、「ミャンマーの難民について知ろう」というアクションについては、食と資料から難民問題に目を向けることを目的とし行ったものである。

世界のご馳走をレトルト食品にして製造・販売している「世界のごちそう博物館」から、ミャンマーの料理である「チェッタアールビン」のレトルト食品を活動補助金で購入し、サポーターに配布した。このレトルト食品は、購入代金の一部（20円）が難民支援協会へ

表2. サポーターから集まった物資

品目	内訳	数量
インスタントコーヒー	ビン	6本
	スティック（カフェラテ含む）	75本
ドリップコーヒー		約50杯分
紅茶のティーパック	100個入り	4箱
	50個入り	3箱
	25個入り	3箱
	10個入り	3箱
タオル	バスタオル	4枚
	粗品タオル	10枚
折り畳み傘		約25本



図1. サポーターから集まった物資



図2. 物資の梱包作業



図3. 「チェッタアールビン」



図4. 調理したチェッタアールビン



図5. 「ミャンマーとミャンマーの難民について知ろう」見開き外側（背表紙・表紙）



図6. 「ミャンマーとミャンマーの難民について知ろう」見開き内側

の寄付となっている。

また Good Samaritans で作成したミャンマーの難民についてまとめたオリジナル資料もあわせて配布した。

【④「サポーター登録料を納めてください（寄付金は任意）」】

サポーターには、登録料として500円の納入をしてもらった。また、登録料に加え、寄付金に協力してくれたサポーターもいた。実際にサポーター登録料は25,000円、任意の寄付金は75,000円集まり、その総額は100,000円となった。このうち難民支援協会に40,000円、国連UNHCRに40,000円を寄付した。残り20,000円はチェッタアールビン購入費の一部、物資の送料、活動継続費に使用した。

【⑤「取り組みの振り返りシート」に回答しよう】

最後のアクションとして、サポーターに「取り組みの振り返りシート」を配信し、アクションにおける取り組みの振り返りと、設問の回答をお願いした。回答から支援の課題を見つけ、新たな支援の方法を検討し、多様性を受け入れる社会への関心を高め、まちづくりに貢献するという視点で私たちに何ができるのか考えることが目的である。

「取り組みの振り返りシート」は、サポーターに取組んでもらったこれまでのアクションの概要やポイントを文書にまとめた。

そして、「(1)：これまでの4つのアクションに関する設問」と、これまで行ってきたアクションを踏まえて、「(2)：多様性を受け入れる社会への関心を高めまちづくりに貢献するために、私たちに何ができるのか考える設問」の、2種類の設問を作成した。

「取り組みの振り返りシート」は、サポーターに文書データもしくは冊子を配布し、Googleフォームまたは冊子に回答してもらった。

ここからは、2種類の設問におけるサポーターの回答を報告する。

(1)：「これまでの4つのアクションに関する設問」

①「難民問題についての動画を見よう」について

サポーターから、「全4回の動画で、難民問題を多面的に扱っている印象があり、初めて難民問題について

地域サポーターと難民支援

～多様性を受け入れる地域づくり～

触れる人にも分かりやすい内容でした。」などの意見が寄せられた。

②「寄付をお願いします」について

サポーターから、「何かしたいと思いがあっても窓口がわからない場合もあるので、今回具体的に必要なものを教えていただいたので、協力することができました。」などの意見が寄せられた。

③「ミャンマーの難民について知ろう」について

サポーターから、「家族で味見しながら食べました。ミャンマーってここなんだねと、資料を見ながら現状を話しながら食べることができ、身近に感じました。」などの意見が寄せられた。

④「サポーター登録料を納めてください」について

サポーターから、「多くの方たちが協力するには適当な代金かと思います。」といった意見が寄せられた。

(2)：「これまで行ってきたアクションを踏まえて、多様性を受け入れる社会への関心を高めまちづくりに貢献するために、私たちに何ができるのか考える設問」

難民支援に携わった経験や気づきが、多様性を受け入れる社会、まちづくりのために役に立つのではないかと思います。多様性を受け入れる社会への関心を高め、まちづくりに貢献するという視点で、サポーターに考えてもらった回答を分析した。

表3. 【Q1】で集まったサポーターからの回答（一部抜粋）

①あなたの身近にある地域の問題や支援が必要な課題	②具体的な解決方法や考え
地域に高齢の方が多いので災害などの避難が必要な状況が心配	現状を知らないと本当に必要な支援はできないと感じるため、まず知る必要がある。
少子高齢化	自治体内でのイベントを開催して、人々の関わりを作る。
相談ができる人が少なく、悩みを抱えている人がいる	日本に来たからよいのではなく、その後の生活を支えること、文化を尊重し、共に歩むことが大切であると感じた。職場や地域で多国籍の方もいるので、積極的に声をかけて関係性を築いていきたい。
人口減少	人口減に直面している日本は、今回の取り組みにもあった通り多様性への理解を深めていくことが大事かなと思われた。今後は、難民支援や移民受け入れの考え方も個人レベルでも考えていきたい。
マイノリティの課題（性的マイノリティ、外国人居住者、障がい者、貧困層など）に対する社会的配慮が不十分	一般的とされている考えに疑問を抱く必要があるかもしれません。問題に対し、どのように配慮がなされているかについて着目する。
空き家問題	空き家を利用して人が集まれる場所を作る。
外国人観光客の増加で文化の違いや言語の壁がある	翻訳機を使って伝えて、貼り紙を様々な言語に訳して貼る。
子どもを持つ母親の負担	シングルマザー、ファザーの生活を知ってもらう。

この設問では、

【Q1】

①あなたの身近にある地域の問題や、支援が必要な課題は何か。

②それに対する具体的な解決方法や考えは何か。

【Q2】

あなたのお住まいの地域で、多様性を受け入れていく社会に向けてあなた自身ができること。考えたことや実践していることを問うた。

【Q1】について

表3のような回答が得られた。

【Q2】について

あなたのお住まいの地域で、多様性を受け入れていく社会に向けて、あなた自身ができること、考えたことや実践していることの回答を分析した結果、このような4つに分類することができた。

・<知る、受け入れる>

・<周りに広める>

・<交流を増やす>

・<支援する>

分類ごとにサポーターの回答を紹介する。

<知る、受け入れる>

- ・文化や習慣、考え方の違いを知ることそしてそれを受け入れ、認め合う。
- ・映像作品などで、外国の文化に触れてみる。
- ・見てみぬふりをしない。
- ・人それぞれの生き方があると柔軟な姿勢でいる。
- ・より多くの考え方や価値観に触れ、想像力を働かせて過ごす。
- ・現状を知り、お互いの文化を理解する。
- ・英語を学ぶ。

<周りに広める>

- ・世界や日本、身近に起きている問題について自分の意見を持ち、周りの人と共有する。
- ・3食に困らず、生活できることが当たり前ではないことも話題にする。
- ・家族、友人、職場で難民問題を話題にする。
- ・地域課題の解決に取り組む団体のボランティアに参加し、見聞きした現状を伝える。

<交流を増やす>

- ・ボランティア活動に参加し多様な子どもたちと関わったり、広い世代の人たちと話せるよう努力をしている。
- ・地域の集会やお祭りに進んで参加し、新たな関係を築く。
- ・関心のある人とのネットワークを作って、必要な時に必要な援助ができる体制を作っておけるコミュニケーションをとる。

<支援する>

- ・ひとり親家庭への食料支援や催しなどを企画運営されている方へのお手伝いをする。
- ・教会や職場で取り組んでいる支援の中で自分にできそうなことを探し、参加する。
- ・物資・金銭面で支援。

7. 成果と課題

この取り組みでは、サポーターに実際に難民の力になる活動を行い、難民問題を身近に感じてもらった。

そして、サポーターに物資を集めてもらい、寄付金を納めてもらったことで、Good Samaritansのメンバーだけでは成し得ない量の物資、金額を集めることができた。

まず、物資については、難民支援協会事務所に相談に訪れる難民に手渡され役立てられた。難民支援協会への寄付は、迫害に追われて日本にたどり着いた難民の方の相談に応えることができ、一人ひとりの状況に応じた宿や食料の提供、医療アクセス、法的手続きのサポートや就労支援など、個別の支援活動を続けることができるようになるという。そして、国連 UNHCR への寄付は、紛争や迫害・災害で故郷を追われた人々の命を守るため UNHCR が実施する緊急援助活動に利用され役立てられた。

また、取り組みの振り返りシートからは、人生経験の異なるサポーターそれぞれの振り返りや地域課題に対するアプローチの方法は、多種多様であり、実践的な内容で学びとなった。

振り返りシートからサポーターの意見を見ると、私たちの社会は多様であることがわかる。

難民はもっとも支援を必要としている人たちである。その一番弱い人たちを支援する中での気づきである、一人一人は尊重され大切にされるべきであるという認識が、多様性を受け入れる、また誰一人取り残さない社会を作ることに繋がると考える。

この視点に立って、難民支援に携わったことの気づきを発信することで、難民支援活動だけでなく地域課題の解決のために行動してくれる人を増やしていきたい。その一歩として、学園祭など地域に開かれた場で、地域課題についてのことや、また私たちやサポーターは、難民支援に携わって学んだことについて、参加者みんなで意見を交換する場を設けたいと考えた。

そのために、これまで築いてきたサポーターとの関係や私たちが育てられた地域社会との関係を大切に、また新たに地域の方たちとコミュニケーションをはかりながら、今後も地域社会と繋がり、連携しながら活動することで、多様性を受け入れる地域づくりに貢献できる視点を養っていきたい。

さつまいもが蒸す新しい風

秋の清里×さつまいもプロジェクト

飯島 瑞希・河内 優実・依田 香穂・権守 七映・清水 蒼・有泉 一葉・萩原 涼々香・武井 優実・竹下 七菜子・中村 結衣・長坂 凜・杉坂 悠志・中島 隼（山梨県立大学）

1. 概要

山梨県立大学安藤研究室清里ゼミは、普段より、北杜市高根町に位置している清里地域の地域活性化に取り組むゼミである。大好きな清里を盛り上げたい、駅前に賑わいを取り戻したいと願う、ある先輩の想いから生まれたゼミであり、現在でも、まずは自分たちが楽しむということを大切に活動している。主な活動内容としては、11月に行われる駅前イベントの実施や、毎年6月と11月に行われるSL清掃への参加があり、過去には子どもたちに清里のことを知ってもらうイベントや、スタンプラリーイベント、今年度の前身となるさつまいもイベントなどを行った経験がある。

今回、学生イニシアティブ事業から支援金をいただいて行ったプロジェクトは、2023年11月12日（日）に、清里駅前C56メイクアッププロジェクトのイベントのコンテンツの1つとして開催された。本プロジェクトの企画、実施にあたり、NPO法人清里観光振興会やC56メイクアッププロジェクト実行委員会、主に甲府にてキッチンカーを営んでおられるよりどり日和さまにご協力を頂いた。



図1. 清里駅前に展示されているC56

2. 問題の所在

本プロジェクト立案および、従来の活動で発見したこととして、まず、清里を訪れる観光客において、私たちと同じ若者世代が少ない傾向にあることが挙げられる。実際に清里を歩いてみるとその少なさは顕著であり、観光客の大部分をファミリーや夫婦、ペット連れが占めていることが分かった。

また、清里のイメージとして、ROCKのカレーや清泉寮のソフトクリーム、牧場などが先行しており、その定着や固定化によって、訪問者の観光の目的が上記の要素になっている現状が数多くある。その結果、清里駅前やその周辺が名高い観光スポットへの通過点の1つとして認識されてしまい、先の地域に位置する飲食店の多くが閑散とするだけでなく、観光客が有名な場所のみに集中してしまう状況が生まれている。

このことは、清里の観光において萌木の村や清泉寮などの一部のエリアが目される一方で清里駅前が見過ごされ、衰退化しつつあるという問題を浮き彫りにしている。

3. 目的

前述した課題のもと、が設定した目的は、新しい清里のイメージを創造し、同世代の若者を呼び込むことであった。加えて、清里観光振興会さまとの対話から見えてきた「循環」や「エシカル」といったキーワードから、SDGsの観点を兼ね合わせることにした。以上のような考え方を大切にしている場所だからこそ、その思いを、メッセージとして観光客に伝えたいと願ったからである。

清里駅前でも空中栽培を行い、そこで収穫したさつまいもをイベントで使用するという地産地消の実現を通じて、食料やエネルギーの循環を意識する機会の創出すること。さつまいも（食）を通じて清里を楽しみ、清里への知識を深めてもらうことも目的の1つとして掲げ、活動を行った。

4. 方法

問題を解決するために、学生が出した提案は以下の通りである。

まず、清里の価値（ブランド）にさつまいもという要素を加えることで、新しい清里の特徴を創造することだ。が事例となり、地域住民にさつまいもの栽培方法を広報していくことで、地元での栽培を促進し、清里のイメージの定着につなげていきたいと考えた。

次に、清里のSLとキッチンカー、さつまいものイベントを組み合わせ開催し、地域内外にも大々的に広報することである。これにより、清里を訪れる人々の興味を引き、観光客の増加につなげることができるのではないかと推測した。

最後に、地域のお店を盛り上げるために、清里の飲食店とコラボして商品開発を行うことだ。これにより、飲食店の認知度を上げるだけでなく、飲食店などの地域全体の活性化にも寄与することが期待できるのではないかと考えていた。

つまり、清里、特に衰退してしまった地域である清里駅前ですつまいもという新たな名物を作り出すことで、清里や清里駅前の観光の可能性の幅を広げていこうと考えたのである。これにより、清里の魅力をより

多くの人々にアピールすることができるだけでなく、清里駅前の発展や飲食店の成長への貢献が可能になるのではないかと考察した。

5. 活動内容

本プロジェクトを実現するにあたり、下記のスケジュールで企画、運営を行った。

・4月

イベントの主軸となるコンセプトを考案し、さつまいもの空中栽培についての調査を行った。また、よりどり日和さま¹⁾にご挨拶に伺い、連携して活動を行うことを決定した。



図2. よりどり日和さまへのご挨拶

1) 若者と地域で創るキッチンカーをテーマに活動されており、販売と交流を通して、地域の人に笑顔とあたたかなひとときを届けている。

・5月

企画書を作成し、現地訪問を重ねながら栽培方法に変更を加えた。清里観光振興会の方とのミーティングを行い、イベントについての構想を関係者の方と共有した。はじめのうちは、うまく育たない、思うようなさつまいもにならないなどの厳しい言葉をいただくこともあったものの、自分たちの思いを伝えつづけて、活動につなげることができた。簡易的な苗の植え付けも行った。

・6月

清里駅前にてさつまいもの空中栽培を本格的に開始

さつまいもが蒸す新しい風

秋の清里×さつまいもプロジェクト



図 3. 植えたさつまいもの苗



図 4. 清里駅に合わせた空中栽培の場

した。空中栽培にあたり、船木会長にご協力いただきながら、使用していない車を塗装し、栽培の鉢として再利用した。

学生イニシアティブ事業への申請や資料の作成を行うほか、大学内で行われている学生地域貢献活動支援事業への申請および、書類作成も行った。

加えて、イベント当日に販売する商品の決定や開発を進めるほか、駅前の景観イメージについて、新しくゼミに加入した学生とも意見を交換し、改めて清里地域の活性化への方針を再確認した。

また、C56 メイクアッププロジェクトの一環であ

るSL 清掃にも参加し、関係者との情報共有を定期的に行った。

・7月

夏の長期休暇にむけた活動内容を話し合った。参加メンバーを3つのチームに分け、担当する業務を明確にしたことで、この段階でのイメージの共有はできていたように思う。そのほか、苗の成長度合いと清里駅前の景観を考慮した苗の植え替えや、イベントを告知するためのフライヤー作成も行った。



図 5. 集客のために作成したフライヤー

・8月

ゼミ内で定期的にミーティングを開催し、進捗状況を詳細に共有するほか、よりどり日和さまとのミーティングを行った。商品開発について、共同で行うのか、学生単体で行うのか含め方向性を決定し、今後にむけた試作会を行った。想定していたお店との開発はかなわなかったものの、よりどり日和さまからのアドバイスや多大なご協力をいただき、どんな商品を提供すべきか、改めて考える機会となった。



図 6. 試作会



図 7. 清里訪問時に水やりをする様子

・9月

8月に行った試作会の反省を活かし、商品を改良するための試作を行った。また清里を訪問したほか、フライヤーの掲示やゼミ内ミーティングを行った。

〈掲示にご協力いただいた店舗〉

- ・きららシティオギノ
- ・清里駅前観光案内所 (NPO 法人清里観光振興会)
- ・ヨハネ保育園
- ・パノラマ市場
- ・パノラマの湯
- ・ROCK など

・10月

最終の試作会を行い、販売する商品を確定した。イベントに向けて備品を購入したほか、地域に赴きイベントで利用するさつまいもを収穫した。最終版のフライヤーを作成し、清里駅前にて掲示していただいたほか、清里観光振興会の Facebook にて複数回宣伝をさせていただいた。また、イベント参加者にさつまいもの空中栽培や食の循環について知っていただくための冊子を作成した。



図 8. 収穫したさつまいも



図 9. 広報のために作成した冊子

さつまいもが蒸す新しい風

秋の清里×さつまいもプロジェクト

・11月

イベントの開催に向けて前日に現地に集合しイベントの設営を行ったほか、複数の学生は清里に宿泊し、出店にむけて食材の下ごしらえ、販売準備などを行った。イベント当日は、沢山の方がの活動に関心を持ってくださり、商品を購入して下さったり、来年にむけたアドバイスをいただいたりした。

イベント終了後には、ゼミとして時間をかけた振り返りを行った。Note や Facebook などを用いてアウ

トプットを行い、来年度への意識が高まった時間であった。また、当日の売り上げ計算も行った。表1がその結果である。

事前に準備できた数に限りがあったこともあり、早い段階で完売してしまう商品が複数あった。大きさに合わせた価格設定を行うことで、購入者に選択肢を与えるだけでなく、需要に合わせた消費につなげることができた。

表 1. イベント当日売上

商品名	単価	個数	売上	合計
ポタージュ	¥300	33	¥9,900	¥40,800
スティックケーキ (中)	¥300	18	¥5,400	
スティックケーキ (大)	¥400	13	¥5,200	
大学芋 (小)	¥300	26	¥7,800	
大学芋 (大)	¥400	31	¥12,400	
大学芋	¥100	1	¥100	



図 10. お客さんに販売する様子



図 11. イベント後の集合写真

・12月

お礼品の作成を続けながら、今後にむけた話し合いを行なった。また各事業の発表資料、報告書を作成した。

・1月

清里訪問および、携わった関係者の方々へお礼品を届けた。



図 12. お礼品の贈呈

ことができる機会を提供することができたと感じている。

②フライヤーおよび、冊子の作成により、清里の魅力や清里ゼミの活動についての情報を広く周知することができたと推測している。フライヤーは観光案内所や ROCK などの人が多く訪れる場所に掲示させていただき、冊子はイベントで関心を持ってくれた方々に配布することができたからだ。これにより、訪れた人々により深く清里について知っていただく機会を提供できたのではないかと考える。

③ C56 メイクアッププロジェクトでの学生ブースの出店は、地元の方々との交流を深める機会となった。出店の際には、作成した冊子を配布し、空中栽培や清里ゼミの活動について説明することで、地域住民に活動を知っていただく機会を作ることができた。

一方で、本プロジェクトを実施して課題に感じたところが2点ある。

①まず、計画的な準備・進行が難しかったことだ。計画から逆算した短期的な目標を設定せず、イベントが近づくにつれて焦りが生じ、準備が追いつかない状況となってしまった。今後は、明確な目標を立て、期限を設定し、計画的に取り組むことが必要であると考える。

②次に、メンバー間での情報共有が不十分だったことである。常に活動に参加できるメンバーが少なかったことから意思決定までの時間がかかり、当初の計画よりもイベントの規模が小さくなってしまった。今後は、円滑なコミュニケーションを図ったり、情報共有の体制を刷新したりするなどして、メンバー間での共通認識を確立することが必要であると感じた。

6. 成果と課題

本プロジェクトの成果として考えられることは、以下の3点である。

①清里駅前でのさつまいも空中栽培の実施は、使われていなかった清里駅前のスペースなどの資源を活用した新たな取り組みとなった。自分たちで栽培したさつまいもをイベントで使用することで、地産地消を促進し、清里駅前の新たな価値を創造することができたのではないかと考えている。さらに、この取り組みによって、エネルギー循環について考える

山梨県立大学
都留文科大学
山梨学院大学

空き家リノベーションプロジェクト「結」

梶原 このみ・中島 光稀・奈良 千尋・小林 城大・佐竹 准弥・駒井 優貴・弘内 那乃映・瀧口 理来・杉田 舜・齋藤 連・雨宮 綾南 (山梨大学)、林 舞子・山田 美乃理 (都留文科大学)、阮 杞梓・高塚 ころこ (山梨学院大学)

1. 概要

本プロジェクトは、山梨県の空き家問題を地域課題として捉え、1軒の空き家アパートを対象にして空き家の有効活用方法について検討する。具体的には、フィールドワークや地域の人々への取材を通して、地域が必要とする空き家の活用策を検討した。そこから空き家をコワーキングスペースや交流施設として利用できるコミュニティスペースにリノベーションすることについて検討した。日本には、鎌倉時代から地域住民の相互扶助を意味する「結」という概念がある。現代の山梨で「結」を復活させたいという思いからコミュニティスペースおよびプロジェクト名を「結」と名付けた。



図1. 除却となった蔵のある空き家

2. 問題の所在

国土交通省によれば、空き家とは「概ね1年間を通じて電気・ガス・水道の使用実績がない建築物」のことであり、「アパートなどは、全戸が1年間空室となった場合」に空き家と呼ぶことになっている¹⁾。日本では空き家率が年々上昇し、喫緊の問題になっている。特に山梨県の空き家率は、2003年から20年以上も全国1位となっており、現在は21.3%であった²⁾。この数値は2番目に空き家率の高い和歌山県を

1%も上回っている。山梨県甲府市内には現在3618軒の空き家があり、2030年には4400軒を超えると推計されている³⁾。また山梨県は別荘とアパートの空き家の割合が多いという特徴があり、山梨県の空き家問題は最も重要な地域課題の1つであると考えられる。

空き家を原因とした地域課題としては以下のようなものがあげられる。

- ①防災性の低下
(倒壊、崩壊、屋根・外壁の落下、火災)
- ②防犯性の低下 (犯罪の誘発、犯罪者の居場所など)
- ③ごみの不法投棄
- ④衛生の悪化、悪臭の発生
(害虫、ねずみ、野良猫、外来生物の居場所)
- ⑤風景、景観の悪化
- ⑥その他
(樹枝の越境、雑草の繁茂、落ち葉の飛散など)

これらの要因によって、地域社会、地域住民への悪影響が生じ、周辺地価の下落にも影響することになる。

例えば2023年11月5日山梨市で空き家が全焼する火事が発生したが、それによって、さまざまな問題が発生し、拡大している。今後空き家が増えれば、より問題が生じることにつながると考えられる。

山梨県に空き家が増えている原因としては高齢化及び若者の県外への社会的移動による人口減少と山梨県

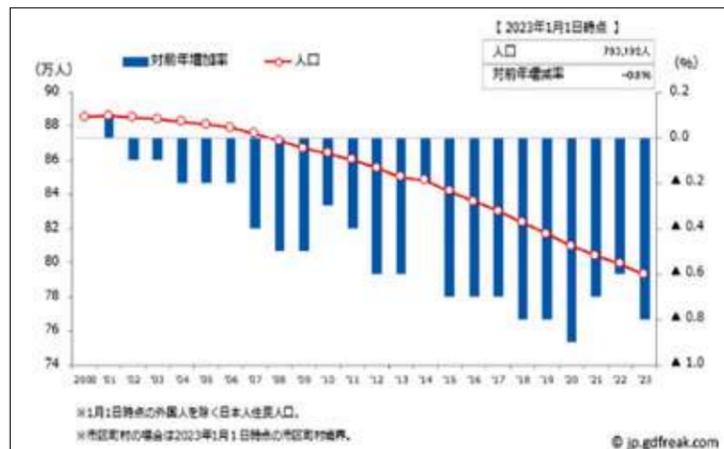


図2. 山梨県の人口推移

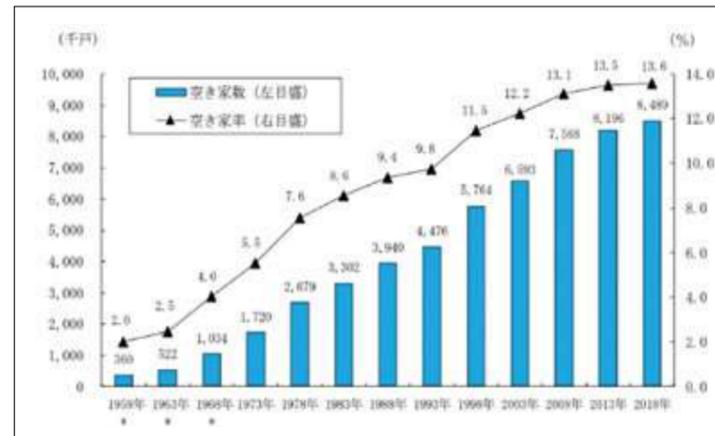


図3. 山梨県の空き家率の推移

の住宅事情が関係していると考えられる。

山梨県の人口が最も多かった2000年に比べると現在は8万人ほど減少しているため、その分空き家が増加している現状がある(図2,3)。また、高齢人口が増え、住んでいた家の後継者がいなくなったり、後継者がいても県外へ転出してしまったりすることで今後も山梨県の空き家率は上昇していくことが予想される。

また山梨県の住宅事情として、山梨県には「新築神話」があり、結婚してから夫婦で住む家を決める際に中古住宅を選ばない傾向がある。山梨県は車社会であり複数台の広い駐車場が必要であり、土地が安く、畑も多いため一戸建てを建てやすい環境にある。都市部と比較して環境的にも新築一戸建て需要が高い土地柄であり、このような地方特有の住環境もまた、空き家の増加に拍車をかけている。



図4. 空き家アパートの場所



図5. 空き家アパート (サンプルルーム八朋)

3. 研究目的

問題の所在で示した課題を踏まえて、山梨県建築家協会の協力を得て、山梨県内の1軒の空き家アパートを取り上げ、空き家をリノベーションする際の財政的問題点を明らかにし、空き家の物件例に対応した活用方法について検討することを研究目的とする。

4. 研究方法と結果

主な研究方法としては、「現地調査」、「フィールドワーク」、「空き家の利用方法の検討」である。空き家の利用方法を検討する上で、その地域の特徴を知ることが重要である。理想とするものと、地域の人々が求めるものとの違いに気付くきっかけとなるからである。以下は、活動内容の詳細である。

4.1 現地調査

2023年6月、最初の現地調査を行った。今回の空き家アパートは、武田神社から徒歩7分、甲府駅から車で8分の場所に位置しており、近くには甲府市立相川小学校がある。人通りが少なく、静かな場所である。

図5は、対象となった空き家アパートである。築37年の鉄筋コンクリート造のアパートで、外には、車4台分の駐車スペースがある。図6はアパートの1階平面図、図7はアパートの2階平面図である。

空き家リノベーションプロジェクト「結」

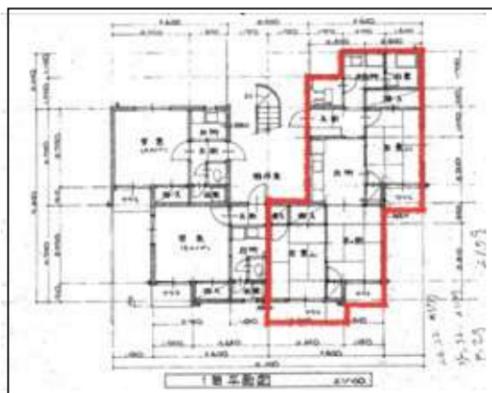


図 6. 空き家アパート 1 階平面図

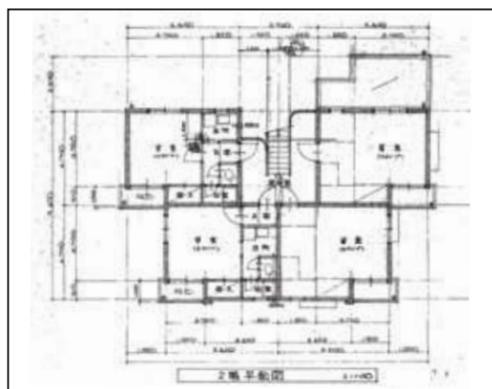


図 7. 空き家アパート 2 階平面図



図 8. 段差のない玄関

部屋は、1階に2部屋、2階に4部屋の計6部屋、他にも、1階東側には3室をつないだ共用スペースがある。

また、この空き家アパートは、新築当初に車椅子の居住者が想定されていたために、玄関は段差のないバリアフリー住宅になっている。(図8)

ここで、仮に空き家を維持した場合、空き家対策の推進に関する特別措置法(空き家特措法)によって、

表 1. 空き家を解体して更地にした場合の固定資産税

	固定資産税	都市計画税
小規模住宅用地	6倍	3倍
一般住宅用地	3倍	1.5倍

表 3. 空き家アパートの経費について

方法	経費
リフォーム	最低 370 万円 (見積)
建物解体費	528 万円
土地価格	8,594,400 円
年間固定資産税	13→78 万円 (更地)

空き家が「特定空き家」や「管理不全空き家」に認定されると、固定資産税が6倍になる。また、空き家アパート(一般住宅用地)を解体して更地にした場合の固定資産税は3倍になる。さらに、今回の空き家は鉄筋コンクリート造なので、解体費用は木造や鉄骨造よりも高く、坪単価で6~8万円、60坪に換算すると360~480万円となる。(表2)

表3は、この空き家アパートの経費についてまとめたものである。表3から、リフォームが最も経費を抑えられることがわかる。実際に見積りを出してもらったところ、最低370万円であった。また、リノベーションすることで、地域に有効な空き家の利用方法を検討できるので、空き家アパートの価値を高められ、メリットが大きいと考えられる。

4.2 フィールドワーク

2023年9月、空き家アパートの北側と南側に分か



図 9. フィールドワークの場所

れ、「フィールドワーク」を行った。(図9)

(1) 北側

北側には、公園や福祉施設、工場などの施設があり、畑が多く見られた。



図 10. 北側施設の図 11~13 の場所



図 11. ①公園



図 12. ②福祉センター



図 13. ③工場

農作業をされていた70代女性(Aさん)に取材をした。Aさんは、20年前に山梨県に戻ってきて、ご主人と2人で暮らしている。北側は、高齢の方が多く住んでおり、のどかで良いところだとおっしゃっていた。一方で、空き家アパートよりも南側では、区画調整が実施されており、比較的新しい家が多いのが特徴だということであった。また、武田神社周辺は文化財が多いため、家や店が建てられないことから、買い物は甲府駅周辺まで行かなければならないことが大変だとおっしゃっていた。北側に住んでいる人は高齢者が多く、昼間に農業をし、帰宅後はそれぞれの趣味を楽しむ人が多いらしく、新しい施設を必要としていないということも話された。

(2) 南側

南側のフィールドワークでは近隣の施設の探索や聞き込み調査を行った。アパートの近くにはお弁当屋さんやカフェ、ボイススクールなどの施設があった。また小さなスーパーもあり、食品や日用品を買うこともできる。(図14)

地域の人々への取材では高齢の女性2名やアパート居住者などからお話を聞くことができた。

1人目Tさんは、家の近所をお散歩中だった方である。静かであるが近くに何も無いから少し寂しいと話された。また近くに大きなお店がないため、買い物に行く際は一緒に住んでいる家族に乗せてもらい、買い物をしているそうである。車の運転ができない高齢者にとっては、近くに買い物ができる場所が少ないのは大変だと話されていた。

2人目Oさんはバス停で待っているところで話を聞くことができた。夜は静かで暮らしやすいと話されていた。またアパートは近くに何個かあるが学生はあまり住んでいないということであった。

また、周辺のBアパート管理者の男性によると、Bアパート(2LDK 家賃45,000円から60,000円)に大学生は住んでおらず、山梨大学やスーパーマーケット、コンビニエンスストアから遠く離れていることが原因と考えられる。

さらに、Cアパート(2LDK 家賃45,000円)の男性居住者も、このCアパートに学生が住んでいる様子はないとおっしゃっていた。

空き家リノベーションプロジェクト「結」



図 14. 南側施設の図 15～19 の場所



図 15. ①パン屋・カフェ



図 16. ②スーパー



図 17. ③弁当屋



図 18. ④絵本専門店



図 19. ⑤ボイススクール

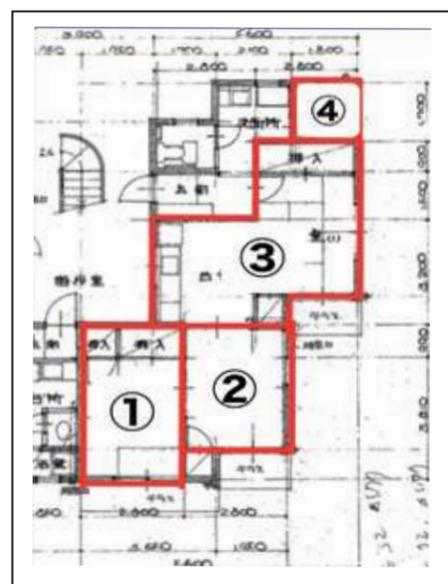


図 20. 空き家アパート 1 階共用部

4.3 リノベーション案

当初、該当のアパートは、所有者の意向もあり大学生向けのアパートとして活用する方向で検討していた。しかし、現地調査やフィールドワークの結果、最も近い山梨大学からも距離が遠いこと、既に山梨大学周辺にアパートが数多くあり、現在飽和状態であることから、大学生を対象にすることは難しいと考え、「社会人」をメインターゲットにすることに決めた。そこで社会人をターゲットにする上でどのような環境が必要かを検討した。

昨今のコロナ禍で働き方が多様化し、在宅勤務やICTを活用した働き方が拡大した。また、コロナ禍でやりたいことがあっても制限され、場所が確保できない人のために場所を提供したいという思いがあった。そのため、空き家をコワーキングスペースにリノベーションし、+αで他のコワーキングスペースと差別化を図りたいと考えた。

今回は、共用部スペースを図 20 のように 4 つに分

割し、それぞれ利用方法を検討した。

①サイレントルーム

玄関から最も遠い 6 畳の部屋を、「サイレントルーム」とした。個人で作業を進めたい人、作業に集中したい人に適した部屋である、この部屋には、壁に沿ってパーテーション付きのデスクを計 5 席ほど設置予定である。また、北側に押入れがあるのだが、襖を取り除き、椅子を置くことで作業スペースとして利用できる。限られた空間を有効利用できるような工夫を取り入れた。

②ミーティングルーム

サイレントルームの右隣の 6 畳の部屋を「ミーティングルーム」とした。この部屋は、誰かと一緒に作業を進めたり、ミーティングをしたりするのに適した部屋である。部屋の中央に大きなテーブルを設置することで数人での会話ができるようにした。

③リラックスルーム

「台所」と「和室（6 畳）」の境界を無くし、「リラックスルーム」とした。この部屋は、休憩や「結」を利用する人々の交流の場である。ソファを設置することでゆっくりとくつろげる空間を作った。そして、壁には「交流ボード」を掲示する予定である。「交流ボード」とは、名前や連絡先、自分が行っている活動、共有したいことなどを記入するボードのことである。このボードを見た「結」利用者が、興味の持った人とコンタクトをとることができ、交流することでつながりや視野を広げることが可能である。

④プライベートルーム

浴槽を無くし、2 畳ほどの空間を「プライベートルーム」とした。この部屋は、ワークスタイルの多様化に対応し、オンライン会議をするのに適した部屋とした。机と椅子を設置し、人目を気にせず会話できる部屋にした。

4.4 コミュニティスペース「結」

現代人は、「コロナ禍」「Society5.0」「VUCA 時代」などのワードが飛び交う予測困難な時代を生きている。自身の仕事を進めるコワーキングスペースの役割だけ

でなく、個々のスペシャリティーを活かして共同し暮らしていくのがこの場所である。その中で 1 人 1 人の良さや強みを活かし社会を創っていくことが必要であると考えた。他者と協働し、「良い社会を創っていこう」という想いでつながる場・共通項で繋がることできる。それにより、仕事のモチベーションが高まったり、暮らしの中に良い刺激が生まれ、より良い生き方に繋がる。

甲州商人は歴史的にも名高く、今や「横浜弁」となった「じゃん」も甲州から生糸とともに運ばれたものである。根津嘉一郎（東武鉄道、南海鉄道）、堀内良平（富士急行）、小林一三（阪急電鉄、宝塚歌劇団、東宝）、早川徳次（東京地下鉄）、佐藤晴雄（京浜急行電鉄）、小林宏治（NEC）といった甲州商人の逸材を輩出し日本産業界を牽引したが、現在では、主要産業である農業の従事者さえも減少の一途をたどっている。もう一度甲府の一角で未来の甲州商人が集う空間を創出したい。スーパー社会人カッコいい社会人が生まれる場所を創出したいという願いと山梨で現代の【結】を復活させたいという思いから名前を付けた。

ここで、プロジェクトにおいて結のペルソナを設定した。下図 21 の人物は、東京都小金井市の築 20 年のアパート（家賃 6 万）に住む 26 歳独身男性で、デザイン会社に勤務しており、年収は 384 万円である。また、長野県に両親と兄夫婦がいる。男性の趣味は、バイク、旅行で Instagram や TikTok などの SNS をよく利用するという設定である。このペルソナの背景は、以下の通りである。



図 21. 結のペルソナ

空き家リノベーションプロジェクト「結」

「大学を卒業して4年経ったが、30歳になるまでにやりたい仕事を見つけないと考えるようになった。だからと言って何がやりたいことなのかが見つからず、ただただ毎日過ごしている。ツーリングでいろいろなところに行ったが、最近は地方に移住するのもありかなと考えている。満員電車で通勤は結構きつい。」

4.5 経費について

山梨県や甲府市など各方面と協議し補助金などについても検討した。最終的に「ふるさと納税型クラウドファンディング」で資金を確保することになった。この方法であればどの市町村でも実施可能である。リフォームの経費が見積で最低370万円のため、不足している20万円分は、学生たちによるDIYで補う予定である。(図22)

4.6 ステークホルダーに対するメリット

ステークホルダーを①大学・学生②自治体③地域住民に分類すると、それぞれ以下のようなメリットが挙げられる。

①学生・大学

- ・教室では学べないようなフィールドワークの機会
- ・地域連携活動の機会
- ・ガクチカ（学生時代に力をいれたこと）の獲得
- ・地元の大学ファンを醸成することで入学希望者の増加

②自治体

- ・地域課題の解決
- ・若い人が関わることによる自治体の活性化
- ・関係人口の増加
- ・返礼品による地域経済活性化
- ・地域との協働による学生の地元就職希望者の増加

③地域住民

- ・地域課題の解決
- ・地元のつながり意識の醸成
- ・取り組みが広報されることによる地域への愛着
- ・地元満足度の向上

4.7 マネジメントとスキーム

(中長期にわたる事業計画)

このアパートの所有者は70代の高齢者で年金生活を送られている。自治体と連携したクラウドファンディングを用いれば所有者の自己負担0円でリノベーションを実施できるが、リノベーション後の管理結プロジェクトが賃貸契約を結び、運用が軌道に乗れば所有者に返還する形にすることを提案した。また、自治体と連携する場合や補助金の申請など任意団体では限界があるため法人化やコングロマリット (conglomerate) 化を検討していく必要がある。

4.8 補助金3万円の用途

補助金の3万円は、主に掃除用具やDIYように使用した。(表4)

表4. 補助金3万円の用途

費目	金額 (円)
ほうき (2本)	200
ちりとり	110
防刃手袋 (6組)	660
メジャー	110
コードレス掃除機 (電源がないため)	20,780
インパクトドライバー	8,120

5. 総括

当プロジェクトでは、山梨県の空き家率を最も重要な地域課題として捉え、山梨県内の1軒の空き家アパートを取り上げ、空き家をリノベーションする際の財政的問題点を明らかにし、空き家の物件例に対応した活用方法について検討することを目的として活動してきた。空き家問題の解決は、地域の活性化、住環境や景観の改善など他の社会問題の解決にもつながることからこそ重要な取り組みである。空き家の有効な活用方法を検討する際、空き家を1つの箱として単独で考えるのではなく、その地域全体との調和を図ることが大切だと考えた。そこで、まずは地域について知ることが必要であり、「地域の声」を聴くこと、そこに住む人の視点に立って考えることが重要だと考え、地域住民への取材やフィールドワークを実施した。取材をしなければ、理想とするものと求められるものの違いに気付くことができなかったのが重要な活動であった。

プロジェクトが始動した際、1年間という限られた時間でリノベーションまで実行することは厳しいと考えた結果、この1年間は、空き家の活用方法を検討することをゴールに設定した。そのため、実際にプロジェクトを通して得られた成果を定量的に示すことができず、完成をイメージできるものもなかった。成果発表会の質問の際にもご指摘をいただいたが、完成してなくても、図面を模型やCADで再現することで、コミュニティスペースの完成イメージをつかむことが可能になり、新たな気づきが生まれることでより快適な空間を創造するこ

とができただけである。さらに、5年後、10年後、運営が軌道に乗った時の将来的な利益を定量的に予測することで、このプロジェクトに現実性を持たせることができた。これは、今回の大きな反省点であり、来年度プロジェクトを継続するにあたり、必要な取り組みであると考えている。また、今後の課題としては、コミュニティスペース「結」を本来の目的で運営していくためには、まずは多くの人に「結」の存在を知ってもらう必要がある。そのため、SNSやコミュニティでの発信に力を入れていきたいと考えている。

空き家リノベーションプロジェクトは山梨県内の3大学合同での活動だった。距離が離れているため、現地に集まって一緒に作業をしたり、スケジュールを調整したりすることが難しく、最後まで全員で活動することはできなかった。しかし、他大学の人とペアになってフィールドワークをしたり、活動がある度に、参加できなかった人たちのために後日zoomで情報を共有したりと、チームワークの強化や協力体制の構築に注力した。この活動を通してチームワークの重要さや効率的なプロジェクトマネジメントについて学ぶことができた。また、このプロジェクトに参加しなければ出会えなかった仲間と出会えたことはかけがえのない経験である。来年度は、実際に空き家をリノベーションしたり、ふるさと納税型クラウドファンディングが始動したりと、チームでの活動が本格化して行く。相互扶助を意味する「結」を山梨県で復活させたいという想いで名づけたコミュニティスペース「結」、名前の通り「結」を大切に、まずはリノベーションを成功させたい。

最後に、山梨県の空き家率が全国で最も高いという事実を、「知る」ことで終わりにするのではなく、「行動」したことで僅かではあるが、確実に課題解決の一步を踏み出せたと思う。しかし、大切なのはこのプロジェクトを継続していくことである。山梨県にはまだまだ多くの空き家が存在している。今回の事例のように、空き家の数だけ新しいことに挑戦できるきっかけがある。「やりたいことがあっても場所がない人」のために、空間を有効活用することで社会問題の解決と、より魅力のある山梨県の発展に貢献していきたい。

ふるさと納税型クラウドファンディング

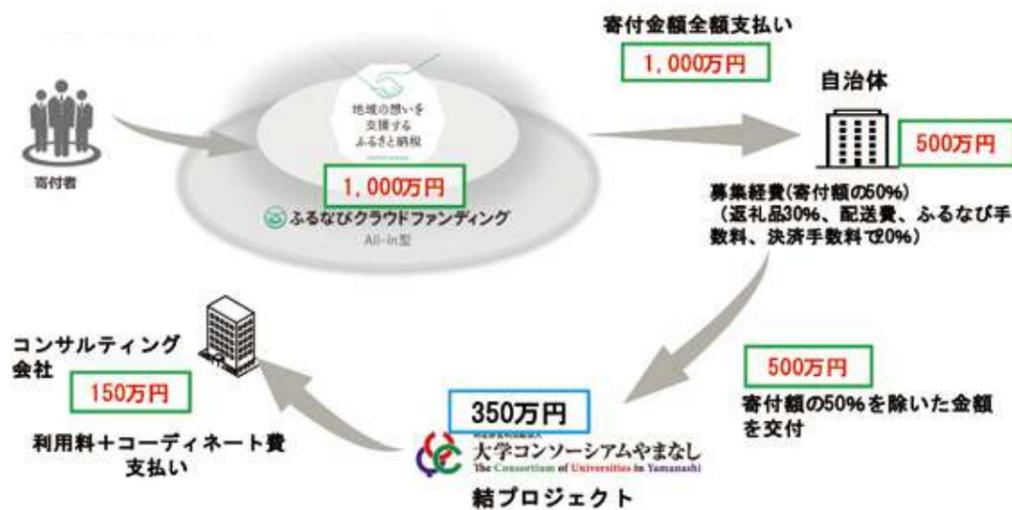


図 22. ふるさと納税型クラウドファンディング

審査員からのメッセージ

審査は、成果発表、活動過程について、
①問題意識（地域課題の明確化、活動目的、問題解決の方法など）
②実践力（計画に沿った実践力、地域の人との協働力、課題発生時の改善力など）
③地域貢献力（目標に沿った実績、地域貢献力、今後の持続可能性など）
④プレゼンテーション力（表現力、構成力、コミュニケーション力など）
の4つの観点によって行われた。

次のステップに進むあなたへ



RENSA 合同会社
代表
審査委員長
岩田 遥

審査員として初めて参加をさせていただきました。学生の皆さんの堂々たる発表や受け応え、とても素晴らしいものでした。以下、今回チャレンジされたお一人お一人に向けたメッセージをお送りいたします。

課題を見つけて、原因を追究し、最適な解決策を考え、それを実行する。「言うは易く行うは難し」のこのプロセスを進んできたあなたは、1年前の自分とは違う景色が見えているのではないのでしょうか？出先で目にするチラシ、街やお店で行われているイベント、流れてくる SNS など、きっと今までは違う視点で見ている自分がいると思います。それはあなた自身の行動で得たものです。その成長を受け取ってみてください。

最後に、1つ質問です。取り組みを振り返って自分に点数をつけるとしたら、100点満点中何点でしょうか？なぜ、その点数なのでしょう？次に繋がる振り返りの機会を届けることができたら嬉しいです。あなたの今と未来を応援しています！



株式会社アルプス
代表取締役社長
金丸 滋

参加学生の皆さん。今年も素晴らしい発表をありがとうございました。毎年参加されている団体にとっては、前年までの活動を更にバージョンアップさせる必要があり、大変だと思いますが、確実に活動の深さが増し、素晴らしい取り組みへと育っていることが感じられ、大変感銘を受けました。初めて参加された団体の活動も、課題の設定から活動まで非常にわかりやすく、発表では時間の都合で触れられなかったはずの喜びや苦労も伝わってきました。発表会ももちろんですが、1年間活動してきたすべてが皆様の大事な経験になったことと思います。また、共に苦労をした仲間を大事にしてください。これから社会に出ていく皆様こそが、未来を作り出すのです。我々もできる限り何かを残せるように、まだまだ頑張ります。

当日、話題になっていた失敗とは、最も良質な成功に近づくためのインプットです。これからも失敗を恐れず、チャレンジすることを続けて行ってください。



特定非営利活動法人
えがおつなげて 代表理事
曾根原 久司

皆さん、発表および1年間の活動、お疲れ様でした。大学時代にこのような経験をする事自体、私はとても価値あるものだと思います。自ら計画したことを実行し、その過程において、試行錯誤しながら悩んだこともあったでしょう。この悩んだ経験さえも含めて活きた経験は、人生において非常に価値あることなのだと思います。活きた経験を通じて、真の知識やスキルは得られないからです。ですから、いつも何かかにチャレンジしている人は輝いて見えるのだと思います。ここでひとつアドバイスなのですが、何か新しいことにチャレンジし、経験する際の心がけとして、さまざまな場面において、もっと何か自分にできることはないのだろうか現状に満足することなく思いをはせることをお勧めします。そのような姿勢や思考法を持つことによって、自分自身の価値のステージを結果的に押し上げてくれることになるでしょう。ぜひ、試してみてください。



山梨県観光文化・スポーツ総務課
課長
樋田 洋樹

プレゼンをお聴きし、発表の成果だけでなく、プロセスにも非常に興味が湧きました。そこに大きな価値があったと思います。一人一人が一つのゴールに向かい、一丸となって取り組んでいくのは簡単なことではなかったと思います。意見のぶつかりなど真剣さゆえの衝突もあったのではないのでしょうか。自身の主張だけでなく相手の考えを丁寧に聴くことの重要性や誰がリーダーでどういう役割分担を進めていかなど資料作成以前にぶち当たった壁もあったのではないのでしょうか。社会人になってからも、0から創るミッションに出くわす場面は多々あります。その際、失敗は成功へのプロセスと考えられるか、また一人で抱えないで仲間を信じて頼ることができるかで活路が見いだせます。その時こそ今回の経験が生きてきます。課題に真剣に取り組まれ、山梨を良くする姿勢やエネルギーは私としても学ぶべきものが多かったです。これからのご活躍を祈念しています。



特明木の村株式会社
代表取締役村長
船木 上次

同じ日本なのに私が生まれ育った時代と現代はだいぶ状況が違う。電話もテレビもない生活は現代の人たちには信じられないだろう。犬は番犬として飼われ、猫はネズミを捕るために飼っていた。決してペットなどいない時代である。現代の若者は野生のたくましさを失っているかもしれない。私は現代の若者に言いたい。指示されるのを待つのではなく、与えられるのを待つのではなく、自ら考え自ら求めよ！新しい価値を生み出せ！ペットになるな！野生の開拓者であってほしい。それが新しい時代の扉を開くことになるはずだから。

2023年度 学生イニシアティブ事業

成果発表会

2024年2月12日(月) 12:30開場 13:00開始

山梨県立図書館 イベントスペース

山梨県甲府市北口2丁目8番1号

山梨県内12大学からなる大学コンソーシアムやまなしでは、学生が主体者となって地域課題について取り組む学生イニシアティブ事業を募集し、今年度は8団体が選定されました。

今回は、「自由研究部門」8団体と「課題部門（空き家リノベーションプロジェクト）」が実践してきた活動の成果発表会を開催します。

事前のお申込みは必要ございません。

入場無料

令和5年度 地域社会活動支援事業委員会

相山 侑菜 (山梨県観光文化部)

久保田 昌宏 (都留文科大学)

服部 智行 (身延山大学)

安達 義通 (山梨県立大学)

清水 健 (帝京学園短期大学)

堀内 均 (山梨英和大学)

池山 洋子 (山梨大学)

新藤 啓子 (放送大学山梨学習センター)

望月 宗一郎 (健康科学大学・委員長)

小幡 園子 (帝京科学大学)

鈴木 耕太 (山梨学院短期大学)

帯金 久 (山梨学院大学)

内藤 敦之 (大月短期大学・委員長)

[スケジュール]

13:00～ 自由研究部門8団体並びに課題部門による成果発表会



17:00～ 表彰式

[審査員]

岩田 遥 (RENSA合同会社 代表) 金丸 滋 (株式会社アルプス 代表取締役社長) 曾根原 久司 (特定非営利活動法人えがおつなげて 代表理事)

樋田 洋樹 (山梨県観光文化・スポーツ総務課長) 船木 上次 (明木の村株式会社 代表取締役村長)

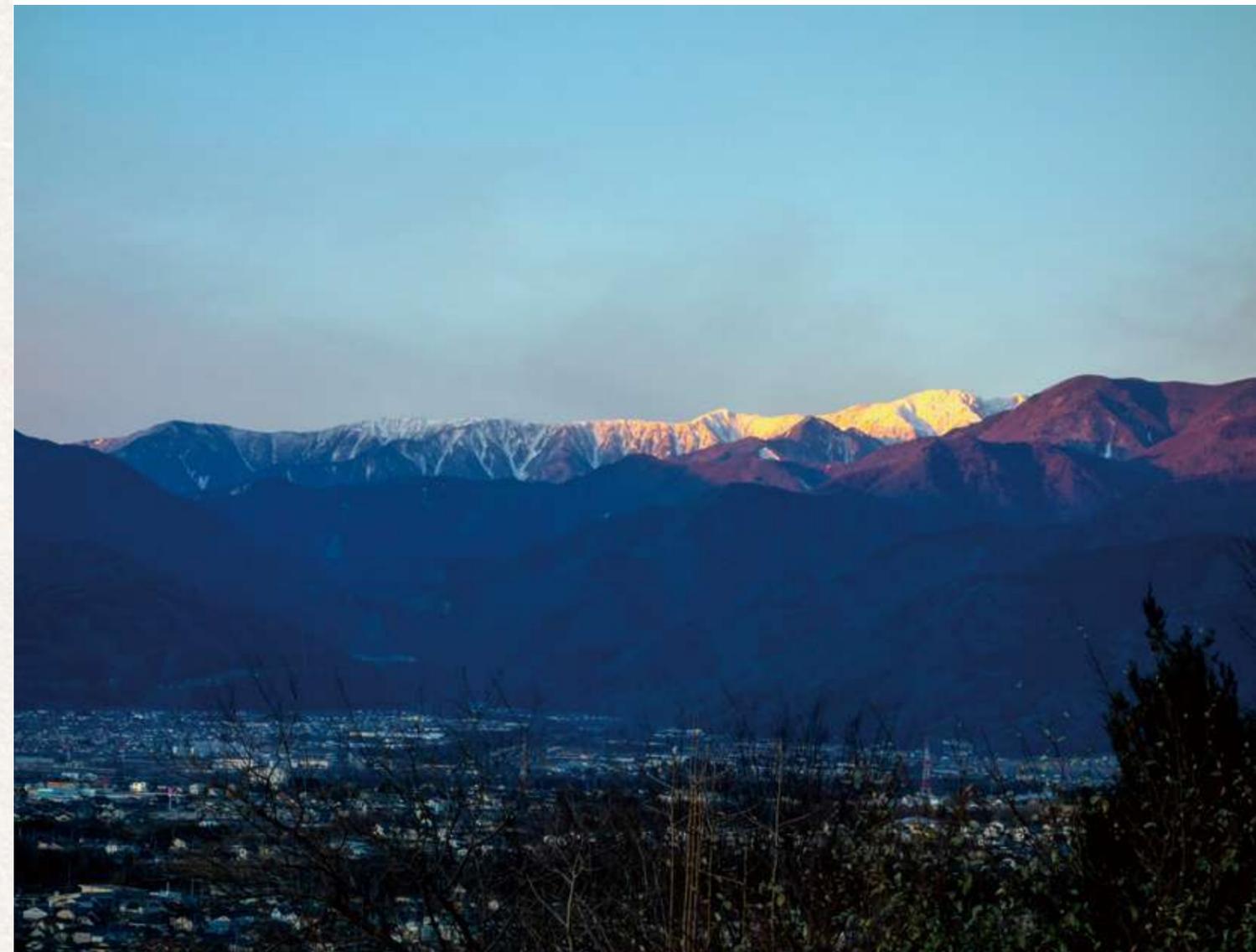
[主催]

特定非営利活動法人
大学コンソーシアムやまなし
The Consortium of Universities in Yamanashi
地域社会活動支援事業委員会

お問い合わせ先

特定非営利活動法人
大学コンソーシアムやまなし事務局
〒400-8510山梨県甲府市武田4-4-37 山梨大学B-1号館328
E-mail: info@ucon-yamanashi.jp

イベント情報は
こちら



人口減少と地域課題

令和5年度 学生イニシアティブ事業報告書

2024年9月30日発行

[編集・発行]

特定非営利活動法人 大学コンソーシアムやまなし

〒400-8510 山梨県甲府市武田4-4-37 山梨大学B-1号館328

[制作]

三井デザイン事務所

※本事業は、「持続可能な開発目標 (SDGs)」の達成を目指す支援事業です。





特定非営利活動法人

大学コンソーシアムやまなし

The Consortium of Universities in Yamanashi

特定非営利活動法人 大学コンソーシアムやまなし

〒400-8510 山梨県甲府市武田4-4-37 山梨大学B-1号館328

E-mail: info@ucon-yamanashi.jp URL: <http://www.ucon-yamanashi.jp>